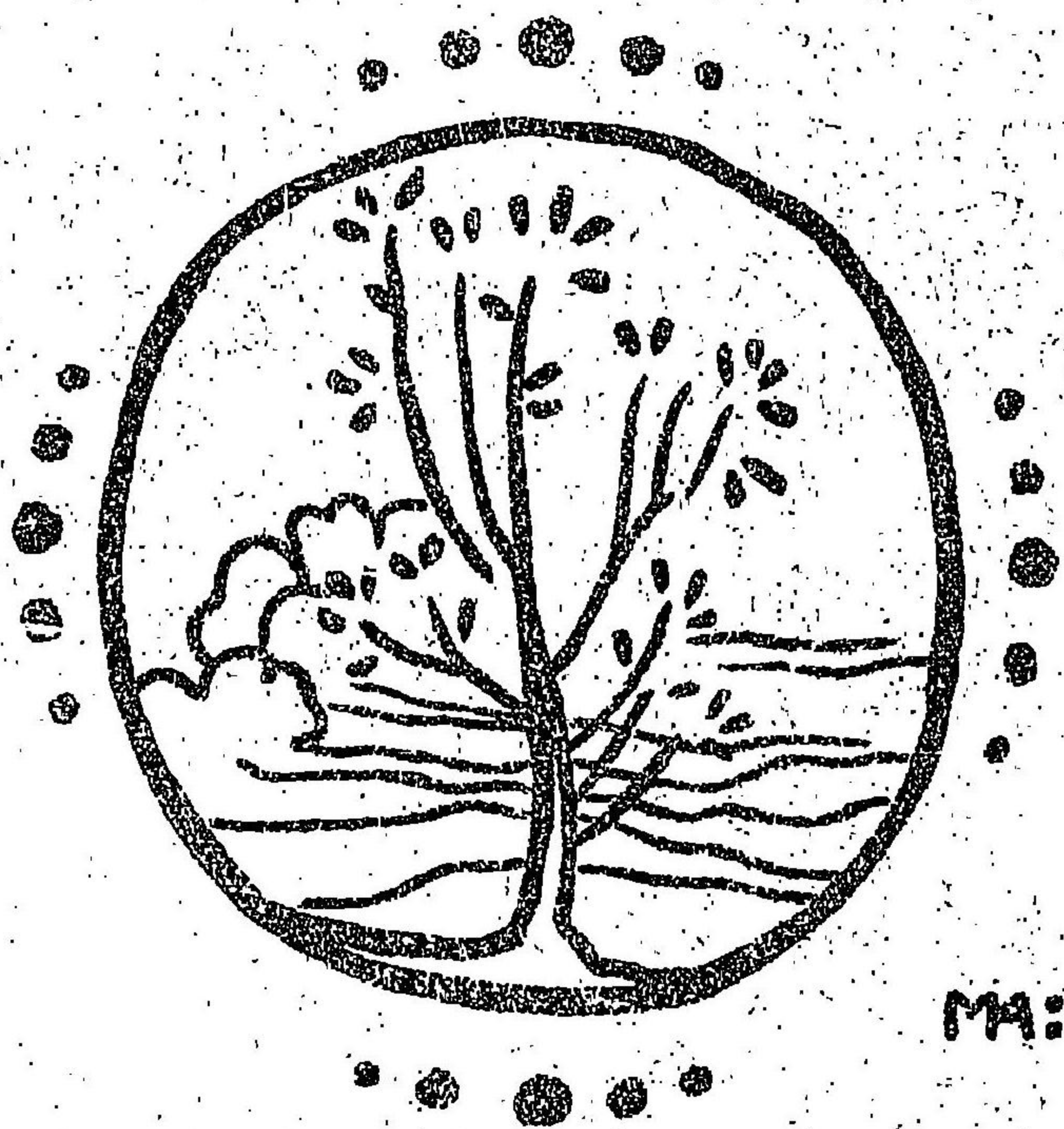


雲之亂

著 枝 瑞 井 孫

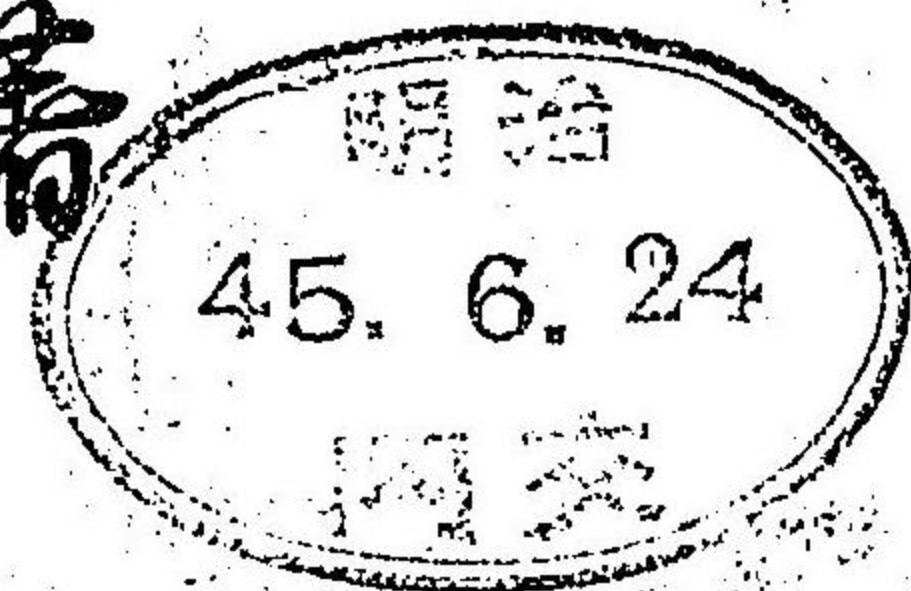


MA:



芳名

藤井信枝著



序

今や東京市内に於て、女學校の名を有するもの、凡て
一百有餘の多きに及ぶといふ、随つて女學生の多きこ
とまた推して知るべし。然るに今より三十年前の東京
は如何。顧ふに明治十五年頃の東京は、女學校と稱する
もの、官立としては、東京府女子師範學校あり、私立と
しては神田に跡見女學校あるのみ。其他二三基督教家
の手になれるものありと雖も、孰れも皆今日の學校に
比すべきものにあらざるや、固より無論なり。随つて當

時學生の少かりしこと、準じて知るべし。

然るに此の時に當りて、吾輩の知れる女學生二名あり、其の一人を井上瑞枝（後藤井の性を冒す）と稱し、他の一人を瀧川壽子と稱す。瑞枝女史は、信州飯山町眞宗寺住職、井上寂英氏の長女にして、明治三年の生れなり。壽子女史は、東京麻布本村町西福寺住職、瀧川鳳巖氏の長女にして、慶應四年の生れなり。一は本願寺派、一は大谷派の違こそあれ、共に眞宗の寺院に生る、豈、意氣の投合するものなかるべけんや。

即ち瑞枝女史は、明治十五年、十三歳にして東京に留學し、故島地黙雷師を保證人として、當時未だ女學校の設けなきにも係はらず、東京市内知名の學者、先輩を訪問して、私宅教授を受け、是に由つて成功せし人なり。但し或る時は跡見女學校に入り、また或る時は當時神田に設けられし、英學館に入學せしことあり。英學館在學中、一百五十名（男子）のクラス中、山田孝道君（今の曹洞宗大學教頭）と、瑞枝女史との二人限り、年末試験最優等のため、特別の進級を許さるゝことありしも、

亦以て其の秀才たりしを知るに足ると謂ふべし。

當時人あり評して曰く、瑞枝壽子の兩名共に、前途有望の器たるに於て、眞に伯仲の間に居す。但し漢籍は壽子女史の長所にして、(女史は根本通明翁の高弟なりき)又英學は瑞枝女史の長所たり、互に一步を譲るものありと、蓋し適評ならん。然るに壽子は已に去ぬる明治二十三年を以て故人となれり、瑞枝女史は幸にして世にありと雖も、また健康の缺くる所あるは、獨り予の遺憾とする所なるのみならず、また以て佛教徒の憾みとなす所なり。

然りと雖も、瑞枝女史、病中と雖も未だ嘗て筆硯を廢することなく、或は亡夫宣正氏の遺稿を訂正して、之を世に公にせんことを努め。或はまた新聞に雜誌に、時々所感を公にするもの一齊ならず、蓋し勤めたりと謂ふべし。今や女史が「亂れ雲」と題し、これら種々の感想文を聚録し、世に之を公にするの舉あるを聞き、予黙止する能はずして、此に蕪辭を添ふることゝなしぬ。

回顧するに今より二十五年前、瑞枝女史は壽子女史

と共に、予の寓所を訪ひ來りて、佛書の聽講を求められしことありき、而して當時予は其の請に應じて、兩女史のために又聊か講義の勞を取れり、是れ予が本書の發刊を聞いて、默止する能はざる所以なりとす。

明治四十五年四月 日

文學博士 村上專精記す

序

湘南の一小漁村に浪居する藤井瑞枝姉から、今度生前の遺稿を出版するから、御香奠代りに序文、否、追悼文を書けとの命令が飛んで來て、僕尠からず閉口した、さて何というて御茶をにごしたものであらう。

世の中に、變つた人も多いけれど、瑞姉の變り方は、また一風違つて居る、一面は洒落なる女達磨、一面は涙もろい姉御、或時は手に負へぬ老婆子と現じ、或時は親切なる伯母さんと變ず、或は禪門の辛味にも親み、或は念佛の甘味にも隨喜し、蟹行の書をひねくつて、見て來た様な説を吐くかと思へば、やゝこしい衣裳のつゞくりをも樂み、炬燵に據つて天下の有象無象を評するかと思へば、庖丁取つて板前に食道樂を、アツと云はせる、温かくして而も冷かに、任放にして而も續密に、出沒隱現變通自在、一名辭を以て蓋ひ盡されぬ人間である、つまり、男女

両性間の中性の人ではなく、男女性の兩極端を鮮かに具有した一人物といふべきであらう。

瑞姉は、北信の山間に人生最初の呼吸をなし、幼時は振袖かざした御嬢様、學生時代には男子に伍して刻苦黽勉し、嫁して常に病床に在り、忽にして寡婦、忽にして漂浪、現今は閑雲野鶴を友とする一病媪、朱門金殿の人々にも交り、茅屋繩樞の徒輩にも親み、遭逢百端、境遇萬變、驕樂と憂悶と、平安と奮闘と、備に世情の冷暖を味ふ、瑞姉一生の徑路は、果して幸か不幸か!

「亂れ雲」一篇、集むる所二十有餘章、よく申せば筆致輕妙、普通に云へば、唯、スラ／＼ベラ／＼と事實ありのまゝを寫した様であるが、實際のところ、事實の様なものに虚構があり、虚誕と思はれる事に事實があつて、平生姉に親炙してゐる僕等ですら、一寸、魔誤突く位であるから、讀者諸君は、須らく眉に唾して讀まれて可なりである、而も現代の他の人々とは全く異つたる分野に於て、諷刺、

教訓、皮肉、馱法螺、鋭き觀察、隠れたる温情、あらゆるものを筆に任せてなく、書きせるもの、其實賞めてよいか、くさしてよいか譯の分らぬものである、併し一面に於て複雑なる姉が半生の經驗より得來りし觀想の斷片、現代世想史の數面の挿畫である、たゞ姉の豊富なる經驗の中に、此書に顯れたるより以上社會の隠れたる方面に於て幾多の面白き材料あるも公にせず、亦、もう一層突込んで書けばよきにと遺憾に思はれる點もあるが、其然らざる所、却つて姉の男性的なるが如くして、而も女性的デリケシーある所以である、多くの人々はこの書を読んで、或は失望し、或はまた會心の微笑を洩すのも、その理由は此邊に存することと思はれる。

是で大概云ひ盡した様だ、こんなものが、序になるかならぬか僕には分らぬが、たゞ姉と親交ありて、而も序文などを徵發されぬ友人知己諸君は、追悼の代りに、一本を購つて、自分が如何に姉の藥籠中の材料に使用されしかを顧み給ふも、亦

一興ならんか、平凡な一言に筆を止むる事如件。

壬子初夏 神戸客舎にて 島地雷夢

尙、此書の内扉の題字は跡見花蹊先生を煩はし、表紙の圖案は有島壬生馬君、中の挿畫は大野隆徳君、いづれも新進洋畫家の好意に依つて出来たものだとうである、實は瑞姉近來天候の不順と共に容態も不穩なので、緒言などを書く元氣もないから、僕に其事を書き添へておいてくれといふ事であるから、右の次第をしるして、前記諸君に、深く感謝の意を表するのである。

雷夢附記

亂れ雲目次

面影

- 一、老爺様……………一
- 二、青年僧……………二三
- 三、御別荘……………三〇
- 四、窮鳥懷に入る……………四八
- 五、佛生會……………五一
- 六、密修練行……………六八
- 七、戀の片影……………八七
- 八、新歸朝者……………一〇九
- 九、巴里の花束……………一二八

一〇、展覧會を聞く……………一四五

藻 鹽 草

- 一、春ちやんの送別……………一六五
- 二、妙華園の灌佛會……………一八六
- 三、本野大使と三越呉服店を見る……………一九七
- 四、戸籍調査……………二三九
- 五、三保の春……………二四八
- 六、龍華寺詣て……………三〇三
- 七、憂愁の人……………三三一
- 八、我家の屏風……………三六三
- 九、一里塚……………三七二

一〇、夏雲……………三八九

追 懷

- 一、御裏方を追悼し奉る……………四〇五
- 二、雨田老師の事ども……………四一四
- 三、逝ける野の人……………四二八

面

影

目

次

四



老 爺 様

×「たまたまチャンの御宅は此處？」

ふと、その懐かしき聲に驚かされて戸外を見れば、繪にかさし高砂の翁と媼にさ
もさも似たる老御夫婦！

○「オヤ小母様！、老爺様も御一所！、よくマアこんなあばら家が御分りになり
ましたネ、」

小母「散歩の序にやつと尋ねあてましたので、」

○「老爺様も御一所とは、誠にどうも恐入りました、」

老爺「この娘は、何だつて、そう己を老爺様、々々々といふのだよ、家内を小母
様というたら、己をも小父様と言へよ、」

○「オホ……、マア七十以上の白髪の御老人を、老爺様といふのに何んの不思

老 爺 様

議もないぢやありませんか、それより私の様な梅干婆をつかまへて、たまチャンだの、この娘だのと、その方がよほど聞き苦しいぢや御座いませんか、しかし、そんなら今迄の埋め合せに、一層兄様とてもオ呼び申しましょうか、」

爺「馬鹿を云へ、」

○「けれど、老爺様、否、兄様だつた、今から四五十年も以前に、本統のハイカラ兄様だつたに相違ナイワ、安政や、文久頃に、イヤ蘭學だの、英語だのツテ御稽古をなさつて、イヤニ社會の先覺者を以て氣取つて入らしたのだものチ、小母様!、」

母「本統にとうですよ、内にはチットモ落ちつかず京大阪から、長崎だなんて、ばかり騒ぎ廻つて御出だつたからチ、内ではどんなに案じて許り居たか知れないですよ、」

爺「國事に奔走したのを、放蕩でもしたかの様に、今頃より返して愚痴を並べら

れては困るナ、女子と小人とは養ひ難しとは、よくいうたものだ、」

○「放蕩だつて、あまりなさらぬ口でもなかつたでしょう、」

爺「古來英雄豪傑の事を成す、必ず後には酒と女性の、援護ありサ、何しろ、あの御維新前の事だもの、色々の事もしたらウサ、しかし、オ前はつゞれの錦の裏を見た事があるか、」

○「錦の袋は、私も持つて居ますが、チャント甲斐絹の裏がとつて在つて、なか／＼立派ですワ、」

爺「それなら己達のした事も裏取として置け、」

○「だん／＼御城が危くなつて來たものだから、間道をオ逃げなさるのチ、」

爺「實際、アノ頃は間道を逃げたり、鴨越を越えたり、千辛萬苦、生死の間を幾度出入したか分らないよ、とても、今オ前達に話した所で想像もつかない位なものサ、今の若い奴等が、ヤレ藩閥だの何のと口巧者な事許り云ふが、生命を賭し

て國務に執掌する勇氣あるものは何人あるか、少しく自分の意に満たねば、直に辭職などと氣樂をいふてはないか、黒幕が邪魔だの、何んのと云ふが、黒幕に居る位のもは、その現職の椅子に在ると否とに關らず、常に國家を雙肩に負うて居るのサ、随分人知れず御苦勞な事だワナ、

○「老爺様もやはり負うて入らつしやるの!」

爺「己は、今モウ負うては居ない、負うともふと、相手と調子を合はせんければならぬから、己は引いて居る、」

○「引くとは?」

爺「皆んなが輕はづみに負うて、負ひ投げをくはすと危いから、後から引いて、土臺の地を離れない様に、輿論に訴へて中心を保つ様にして居るのサ、そして、世の中は、唯、政治の一方許り見ては居られん、教育の方面によほど重きを置かんければナ、」

○「本統に、そうすネ、充分に教育された人物がなければ、やはり文明の國務は進捗しますまいからね、」

爺「そこが七分三分の兼ね分の六ヶしい所サ、」

○「老爺様も長らく外國へ留學なすつたのですか、」

爺「留學といふ程でもないが、度々外國へは行つたよ、しかし近來年を取つたら洋服などを着るのが物憂くて、とんと外國へは出かけんよ、」

○「随分、昔の洋行には面白い話があつたでしょうネ、」

爺「イヤ面白いの滑稽のと云うて、赤毛布、京登りの段ではない、それはく色々様々な出來事が澤山在つたよ、」

○「少し伺ひたいものですネ、」

爺「イヤ、到底御話にもならんが、取る年で大かた忘れた様なものサ、」

○「それでも、少しワネ、」

爺「何でも、二度目に行く時に大西洋でひどいしげに逢ひ、同船に近藤といふ男が居つたので、

ちもひきやこんどの様な船わたし、

ひどい憂目にアトランチックとは、

などというて、船に酔ひころげた事もあるがな、」

○「私の知つて居ます人が、いつか印度洋を通る時に、

涼しさやアイスクリームウルゴール、

などと云うたと聞きますが、あの頃の皆さんの狂句や、狂詩などを集めたら、さぞ面白い本が出来ましやうネ、」

爺「随分出来そうな事だな、併し、己が始めて倫敦の公園で、カナリヤが樂器の譜に合せて鳴いて居たのには、ビックリしたよ、それから、なんでも、こんな小鳥ですら教へさへすればかくも巧妙に歌ふから、人間の兒は育て次第、どうにでも

なると思つて、二人の息子を彼地へ連れてゆき、一人は佛國で、一人は英國で塾に入れたがな、」

母「まだ明治の始めて、外國はどうやら、赤髯の國で恐いナンテ云うて、私達にはよくも分らない時代に、八歳と十二歳の小供二人、紅葉の様な手をついて、オ母様行つて参りますというた時の事などは、今思ひ出しても涙を催しますが、アノ時思ひ切つてやつた丈の事があつて、今ではどうか御上の御役にも立つ様になつたのですが、……實際五人の小供を育て上る迄には、なか／＼苦勞もしましたよ、たまチャンなどは、其苦勞は知らないのだから、案外氣樂な生涯サネ、」
○「しかし、いよく皆様出来上つて御覽になると、なか／＼オ樂みも少くはないでしよう、」

母「實際小供など、いふものは、我子なればこそ育てしも居られるのです、よく世間では子を育てるは樂み半分、苦しみ半分と云ひますが、やつと小供が手が

ぬけると、やれ嫁の心配だの、孫の世話だのと、先づく一生、女は樂なしてすよ、」

○「しかし、その御上の御用に御立ちになる様に迄御育てになれば、御苦勞甲斐もあるといふもので、御上の御用ばかりではなく、亡夫なども、御令息様が彼地に御出になつた許りに、何程便利を得ましたか知れませんか、實に病氣から死亡の始末、みんな御令息様の手で、残りなくして戴きましたのですから、旅で果てましたとしては、あれ以上どうも仕様がなないので、私達は少しも遺憾な事はないので御座います、」

爺「意外な所で息子が御役に立つたものサナ、」

○「あれがもし印度の内地とか、又は外であつて御覽じろ、何が何やらさつぱり臨終の消息なども知る事が出来なかつたのですよ、彼地の御令息様から、委しい御手紙を戴きまして、委細分つたのですが、十二歳から外國に御出になつて、漢

字も日本文も、ヨークあれ丈御書けになれたものですネ、」

爺「中頃一度日本へ呼び戻して、頑固な漢學塾へ入れて、大分もまれたからだよ、」

○「長く外國に入らした方などは、ヨーク片假名や、あぼつかない楷書などで手紙を御書きになる方が多いのに、御令息様などは、立派な御筆跡だから、どうしたのかとおもつて居りましたが、成る程そういふ事も御在りましたのネ……、モウく御令息様への御恩報じは到底出来ませんから、せめて貴方様方が御滞在中に、何かオ好きな御食物でも差上りたいものですが、何が御好きで入らつしやいますか、」

母「實際宿屋に居ましては、魚類許りてアキくしますから、何かアツサリしたちにしめても調理へて下さらんか、」

爺「己は豆腐が大好きで、家内は蒟蒻が好き、兩人の趣味はよほど異ふのだから

怨みのない様にどつちもこしらへてくれよ、」

○「そんなものなら、オ安い御用ですが、老爺様、そんなら、今日早速今から御飯を差上げますから、御ゆつくり遊ばせよ、

いとしい蒟蒻可愛い、豆腐

仲よい同志の五十年、

といふ御馳走を致しますから、モウ貴方々は金婚式が御近いでしょう、」

爺「くだらぬ事を云うて、年寄りをいぢめないで、早く湯豆腐でもこしらへよ!、」

○「けれど、この御馳走は何んだかあてゝ御覽遊ばせよ、」

母「何だらう、蒟蒻の白あへかネ、」

爺「サレバナ何んだラウ、

性の違うた蒟蒻豆腐

ませつかへしチャ困ります、

といふものだラウ、」

○「マア、老爺様も昔とつた杵柄で少しも油断がならないツ、」

爺「まだく、いくら老耄しても、オ前達位に負けはせんサ、」

○「御免遊ばせ、」

母「そんなら、御遠慮なしに御招かよほれして行かうかね、」

○「どうぞ、そう遊ばして、それに小母様の好きな小豆粥も、老爺様の御好きな柚味噌もありますから、」

爺「ウ、それはよい御馳走が在るな……食後には己が謠曲を謡つて聴かせるから聴けよ、己は謠曲に就てはオ前に感謝せんければならぬ事が在るのだ、」

○「何故です、」

爺「ソーラ、先年、お前が己にモウ年取つてから始めた謠だから、到底物にならぬといふたラウ、」

○「或る人が云はれましたから、左様に申上げましたので、あれをまアだ覺えて入らつしやるですか、」

母「あれから、たまチャンが、ア、いうたからとて、大變な御勉強でしたよ、」

爺「あれが導火線になつて、大に己も發憤して、今では師匠から奥許の傳授を受ける様になつたから、お前に逢つたら、謠つてきかせて、かつは禮をも云はうとおもつて居たのだが、恰度よい折を得た、」

○「マア、とんでもない、ツイ口がすべりましたので御免遊ばせ!、」

爺「イヤ、決して謝罪するには及ばん、眞實あれが、己には大變藥になつたのだから、」

○「マア、驚き入りましたね、そんなら其禮として、私に無束修、無月謝で教へて下さいましな、」

爺「諾々、教へてやるともく、」

母「大に御師匠氣取りですな、」

皆々「アハ……オホ……」(明治四十一年)

青 年 僧

先頃中、川向ふの法華寺へ、若い住職が來たといふ事を聞いた、けれど、つひ誰が來たとも穿鑿もしないで居た、然るにこの間、留守中、披露の扇子に添へて置いて行つた名刺を見ると、嘗て一面識のある青年である、まアどうして、あの人が、こんな山の中へと、種々不審が起らぬでもない、そこへ丁度、親族の學生が來合せたので、よい幸と、同伴してその寺を訪ふべく出かけた、田畑の間の近道を通つて横から、ヒョイと寺の門前へ出る、門は、昔風の赤塗で傾きかゝつた屋根には、草など蓬々と生へて居る、

同伴の學生は、お寺の門などは、新らしいよりも、斯う朽ちかゝつて居た方が、

趣味が在つてよいですナア！と、感嘆しつゝ眺めて居る、門を這入つて、杉の古木の覆ひかゝつた石階を登つて、庫裏へ案内を乞うたれど、森閑として少しも答へがない、あたりの戸締りもしてないのだから、まさか不在でもあるまいと、本堂の方へ廻つて見ると、住職は今將に、たすきがけて、大働きの最中である、

「マア、御掃除の所を御邪魔をすすみませんが、此の間の御披露の御答禮ながら、一寸伺ひましたので……」

と云ふと、住職はビックリして、私の顔をしみく見ながら、

「ヤア阿方が、隣寺に御出でとは少しも氣がつかまませんでした、……これは全く奇遇でしたナア、」

「世の中は広い様でも狭いものですチ、」

「どうして、阿方はこちらへ！、」

「私よりも、貴僧の方が、どうしてこんな山の中へ、」

「それには、種々因縁もありますので、委しい事は本堂では御話も致しにくし、マア庫裏へ行つてゆるくと、」

と、住職は襷をはづして先に立ち、折あしく小僧を町へ使にやつたからと云譯しつゝ、御茶の用意などに大まごくと、

やがて一應久濶の挨拶もすみ、住職は、外に何も御馳走が無いからと云うて、庭の枇杷の木へ登つて、黄いろい鈴なりの實を澤山ちぎつてくれる、鼠木線の着物をきて木登りをした容子が、如何にも俳畫めいて居ると云うて、學生はまた大に感心して眺め入つて居る、

かくて枇杷を味ひつゝ、話柄は色々入り亂れる、

「貴僧は曾て坊主はイヤだから止して中等教員になるなんて、頻りに英語などを勉強して居らしたぢやありませんか、」

「僕も一時はさう思つて、師匠の怒りをも顧みず、大にやるつもりでしたが、其

後非常な大病をして、その豫後が何うもよくないので、スツカリ浮世の學を諦めて、又もとの坊主に立かへつたのです。」

「それでいよく、今度は本統の發心出家ですね。」

「ハハ……、まあそんなもので……。」

「御檀家の人達は、今度の御住職は、本堂も、境内も、よく御掃除をして大變奇麗にして下さると云うて、非常に喜こんで居る様子ですよ。」

「それだから、イヤになつて仕舞ふのです、人が、折角、發心修行して、佛道を成ずるつもりでかゝつても、檀家の者共は、掃除番か、寺男を雇うたつもりで居るのですからナア。」

「檀家の者の喜こんで居るのを、何もそう嘆息なさらないでもよいでしょう。」

「ナニ、それ丈なら、ムキになつて怒るにも當らないのですけれど、折角此方が熱心に宗教的の話などをしかけても、少しも耳に入らず、新聞の三面記事の話で

もすれば大喜びといふ風なんですから……、つまり、こんな田舎寺へ来て、自分の修養を積むには師匠はなし、さりとて人を教ふるには、相手が無いのですからナア。」

「不斷はそうでも、月に何回と、日を極めて、法話會でも御開きになつたらよいでしょう。」

「從來、この寺では、一年一度御會式の大勢やつて来て、飲んだり、喰つたりするツきり、平生、法話を聞くなどいふ習慣は少しもないのですからナア。」

「それを、新たに例を御開きになつたらよいでしょう。」

「追々にはそうしたいつもりですが、何しろ無教育な百姓や木樵ばかりですから、平日は忙がしいが先に立ち、偶の節句には町へ買物に出かけるといつた様な譯で、相談がまつまりさうにもないです。」

「全體、貴僧が何うして此所へ居らつしやる様になつたのです。」

「此邊は、氣候が溫暖で、寺も有福と聞きましたから、病後の保養ながら……」
 「それでは、貴僧も動機は肉牀の静養のために在つて、心靈上の問題ではなかつたのですか、」

と、チツクリ皮肉を云うて見る、

「そう擧げ足を取られては閉口ですが、……實際、身牀が丈夫でなければ、やはり、充分の佛果成道も得られませんからナア、まあもう少し、身牀を恢復してから、大にやるつもりです、……今は、まあ尼連禪河（にれんぜんが）の休養といふ格です、アハ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

住職もこんなことを云うて、自分ながらをかしがつて居つたが、私も思はず微笑みつ、

「ソウ、そして、牛乳でもたん、と召し上つたらよいでしょう、……そして魚肉は？」

「魚肉も、一時やつて見ましたが、その爲めに、殊更、身牀が強壯になるほどの影響もない様ですから、近來は止めて居ますが……、」

「御精進の方が、却つて胃のためによいと云ふ人もある様ですからね、西洋でさへ御精進をして居る學者が在るといふ事ですからね、」

「全體、我々の宗祖（日蓮）は、律國賊とさへ稱せられた程だから、肉食のみならず、妻帯にした所が、頑固に排斥せなくてもよいのですが……、」

「けれど、御祖師様は、妻帯もなさらず精進潔齋で居らしたぢやありませんか」
 「祖師は、あの様に、一生涯、常に戦闘列に在る様な境遇で入らせられたからです、それを、末弟にまで、強ひ様とせられた譯ではなからうとおもふのです、」

「それでは、貴僧も妻帯なさるおつもりですか、」

「僕は、妻など持つか、持たぬか、それはまあズット先の話です、」

「何故です、」

「僕は、妻帯は宗祖にそむくとはおもはないのですが、自から解脱も出来ない中に、妻子を持つのは、一種の罪悪の様な気がしますから、」

と、住職はいさゝか悄然たる様子！

「いよく、解脱して仕舞へば、妻なんて持たうとも、おもはぬ様におなりなさるでしょう、」

「そんな事はないです、親鸞聖人の如きは、大悟徹底してから、肉食妻帯を實行せられたてはありませんか、」

御面と一本、眞額からあびせられた、

「それもそうですチー、」

「僕は、追つて妻帯の可否に就いて、少しく眞宗を研究して見やうと思ふのですが、何か御持合せの本はありませんか、」

「御假名聖教などなら持つて居りますが、御聖教を御讀みになつたつて、そんな

事が分るでしょうか、」

「よく讀んで見たら、屹度、何かヒントを得るに相違ないとおもはれるのです、」

「今更、妻帯の可否などを研究するより始めから、坊さんにおなりなさらなければよかつたのですのチー……貴僧の御實家などは、地方で有名な御家でありながら、どうして、御寺へ小僧になんぞおあげになつたのでしよう、」

「それには因縁もあり、少しは、迷信も加はつて居るのです、」

「御差支へがなければ、是非御伺ひたいものですチ、」

「僕は、七人兄弟の中の、一番の末子なんです、それで、父が没する時に、御寺へ上げて坊主にする様にと遺言をしたのだそうで、」

「遺言？、そしていくつの時御寺へ御出でになりましたの？、」

「僕の七歳の時、父が没し、そして、八歳から寺へ行つたのですが、……今から考へると、遺言なんて、つまりぬことをやつたものだとおもひますが、父の方

はそれとして、母の方にも、妙な迷信が在つたのです。」

「迷信！、どんな？」

「母は、また、僕の生れた時臍の緒が袈裟がけになつて居つたから、此子は坊主にしなければ天死をするとかいうて、大にかついだものだそうです。」

「まあそんな事情なんですか、併し、地方には、よく有り相な事です子……、そして、八歳位で、よく泣きもせずに御寺で暮せたものです子。」

「所が、子供の時には、僕は御寺が大好きだつたのです、お寺へ行くと、直に寺の御上人さんが、御菓子を下さる、それが嬉しくて度々遊びに行く、もう御寺の人には小僧になる前から深い御なじみになつてゐたので、内で兄貴達にいちめられるよりも、御寺で、坊さん達に可愛がられる方がよいと思つて行つたのです。」

「そう伺へば、なる程そうかともおもはれます子。」

「そして、名家の子だから、僕をよく育て、住職の候補にすれば、檀家の折合

ひもよからうといふので、師匠は、随分僕を可愛がつて、外の兄弟子達を差し置いて、僕を中學林にまでも入れてくれたのです。」

「成る程。」

「中學林から大學林と、順に行けば、師匠にも安心させ、僕もまあ、縣下第一等の寺の御上人様となれたのですが、大學林へ這入らず、やはり青年の血氣にはやつて、途中で語學などを始めましたから、今では虻蜂とらずで、つまらぬ事になつて仕舞つたのです。」

「私の御目にかゝつた頃は、丁度其頃で御座いました子、縞の羽織などを着て居ましたから、私は御坊さんだなどといふ事は一寸氣がつかせませんでしたよ……併し、まだ御若いのですから、今からだつて勉強なされば、立派な御上人様になれるぢやありませんか。」

「それが駄目なんだから、つひくこんな所へ来る様になつたのです。」

「どうしてです」

「一方には、僕の病氣と云ふ事も、勿論大なる理由ですが、もう一つには、一昨年師匠が死去せられ、おまけに、生家の方は遠に破産して仕舞つたのですから、もう學資を供給してくれる人が無くなつて、今では、獨力自活、到底正則に進む事は出来なくなつたのです、」

と、住職は息をはづませて長大嘆息！

「そんなに自棄なさらなくつても心がけてさへ御出でになれば、どんな修養でも御積みになる事が出来るでしょう、」

「修養とか、解脱とか、一口に云つて仕舞へば何んでもないのですが、さて、實行の一段に至ると、なか／＼容易ではないものですからナア、」

「そうでしょうか、」

「近い話が、現今ズツト各宗を見渡した所、高僧とか、碩徳とか、評判の高い方

でもいよ／＼其人に近づいて、ブツカッて御覽なさい、そんなに、ピツクリして清心丹の必要な人も在らうとはおもはれんです、況んや、僕等の様なものは、どんなに悶いても高が知れたものでさア、」

「まア！、」

「おまけに、身は、不治の病に犯されて居るとなつて來ては、なまじひに種々の野心を持つだけでも、心身に障るといふものでしょう、」

「野心と云へば語弊があるけれど、つまり、一種の向上心とも、希望ともおもつて、進めばよいぢやありませんか、」

「今さら、阿方にそんな御説を承はらないでも、僕も、もう、そんな事は、此の山寺へ這入る前に、考へて／＼、考へぬいて、如何にして解説せんかよりは、先づ如何にして、生命を保持せんか、僕の大切な問題で在つたのです、……蟹は、己の甲羅に似た穴を掘るといふ例の通り、僕は、僕自身に適當な穴へ籠つたつも

りて、此寺へやつて来たのです。」

「そう安心立命がチャント纏つて御出になれば、それで結構ですけれど、始めの御話の様では、山寺に御満足と云ふのでもない様に存じまして……。」

「無論、満足はして居ないのですが、これより以上のベストは、今の僕には見出し得られないのですから、まあ云はゞ、消極的の満足と云ふべきでしょう。」

こんな話を二人で熱心にして居ると、今までしきりに床の間を眺めて居た學生が傍から突然、

「日蓮宗は多神教ですか、
と問ふ、

「どうだか、よく御上人さんに伺つて御覽なさい。」

「そんなら、御住職に伺ひますが、あの床の間のかげものは何んです?。」

「あれは、法華の十界曼荼羅というて、極めて尊いものです。」

「ハア、御曼荼羅様ですか、僕はまた、真中に御題目が書いて在つて、周圍に多勢の菩薩様だの、如來様だの、神様だの、そうかと思へば阿修羅だの、龍王だの、ゴチャ／＼並べて在るから、不思議なものだともつて拜見して居ましたよ。」

「つまり、それは行者、即ち我々の心の有様を現はしたもので、ざつと見れば、

心一つで鬼にも蛇にも

なれや神にも佛にも、

といふ譯なんです。」

「ナル程、そういう意味のものでありますかなア……そして、兩側にある、案山子の弓の様なものにはあれはなんです。」

「困りますナア、案山子なんて仰つしやつては、……あれは、愛染、不動二明王をシンボライスしたものだとの事ですが、委しい事は神秘として在つて、御素

人方に一寸説明しても、お分りになりすまい。」

「そんなに、六ヶしいのですか、」

「それが本統に解るまでには、宗教も哲學も丸呑みにしてからでない駄目ですが、マア、そう云ふ拙者等ですら、まだ研究中なんですから……。」

「そんな六ヶしいものなら、素人の信者はどうします、」

「それは、常に御題目を唱へて居ると、妙法の加被力に依つて、自然に解つて來るのです、」

「それで、日蓮宗の信者は、あんなに熱心に御題目を唱へるのですか、」

「まあ、そうおもつて、貴君も試みに御題目を唱へて御覽なさい、有り難くなるかも知れないから……。」

と云うて、住職がカラ／＼と笑つた時、私は傍から、

「そんな臨時氣まぐれに法華曼荼羅の御講釋を伺つた位では、到底、即身成佛も六

ヶしからうから、もう御暇をして、またゆつくり伺はうぢやありませんか、御上人様も、今日は御忙しい所だから、」

「それぢや、かへりましようか、」

かくて二人は、住職がしきりに止めるのも聞かずに、歸途に就いた、

寺の門を出ると、一面の早稲田に、初夏の日光が華やかにさして、赤いたすきの村乙女が、あちこちするのが、油繪の様に目の前に浮び出で、而かも、遠近には蛙が、かしかましく鳴きかはして居た、

嗚呼あの青年僧！、あの人の運命は、今後どう云ふ方に發展する事やら、私は一種の哀愁を感じつゝ、内へかへつて來た、而かも學生は、

「僕は今後、非常に偉くなつて、高山博士の様になつて、大いに日蓮を研究するつもりだ、」

なんて、元氣に叫んで居た、(明治四十四年)

御別莊

伯爵「ヤア禪尼！、近頃珍らしいではないか、どうして来た？」

尼「親族の者が参りましたので、散歩ながら、一寸御別莊を拜見に出ましたので……」

伯「大に久しぶりぢや、今日は、ゆっくり話して行つてもよからう、」

尼「實は、御留守であらうと存じて、ゆつくり休息をするつもりで参りましたら、今、御來邸になつたと聞いて、がっかりした所で御座います、」

伯「己が居つてもかまはぬではないか、」

尼「それは左様ですけど……、時に、御同伴の方は誰様で入らせられますか？」

伯「ウ、そう、禪尼は此老人にはまだ始めてて在つたな、……之は、京都の隱儒〇〇先生と云うてな、和漢の學に精通して居らるゝ方だから、御昵近にな

つておいて、又、解らぬ事が在つたら、何んでも伺ふがよい、……大學の史料の連中てさへ、折々、此先生を煩はす事がある位だから、」

尼「左様で御座いますか、スルト、〇〇通史の著者で入らつしやいますネ、」

伯「知つて居るか？」

尼「御名前丈は、兼て一寸……」

伯「時に先生！此禪尼は、妙頑といつて、久しく黒隱禪師の弟子になつて居るが、一向はや、進歩の見えない頑固な禪尼で、妙に物を根問ひをする惡習癖を持つて居る尼ぢやに依りて、時に、面倒でも質問に應じてやつて見て貰ひたいものだ、」

先生「それは始めて御目にかゝります、拙者は〇〇と申す者で御座るが、フトした御縁から、近頃、伯爵閣下に御別懇に願ふことになりまして、イヤハヤ、生來狷介な性質で御座るので、今迄は一向富貴權門に近づいた事もないので、かゝる御別莊などへ参りますと、誠にはや尻こそばゆい様な感じが致しまして、誠

にはや……」

尼「マア、そんな事を被仰らず、御ゆくり滞在を遊ばせよ、如斯、小さい御別荘といつては、伯爵に對して失禮に當るかは知れませんが、岩崎さんや其他の宏大な富豪の御別荘に比べますと、此方などは、丸て對照にもならぬ程、瀟洒した、小さなものですよ、」

先生「併しかうやつて呼ばゞ、將にこたへんとする三保の松原と相對し、白帆の來往を掌中に眺め、又、此方の山の峽から、富岳を望んだ工合は、丸て自分が羽化し昇天し相な心持が致しますのでハハ……」

尼「私達の小供の頃は、御庭先の松が小さくて、向ふをながめるのによろ御座いました、今では、少し大きくなりすぎまして、どうも少しネ……」

先生「スルト、貴方は度々此邊へ御出かけて、」

尼「へい、娘時代から今日までには、随分度々御邪魔に出ましたワネ、伯爵……」

伯爵……」

先生「やはり、御縁邊でも入らせられますか？」

伯「ナァ、親族でも何んでもないが、至極、のんきな性質で、いつもやつて来て、内の娘達を煽動しては、同じ様に我儘を立ち働く癖者で、家内なども、度々こまりはてゝ居ますよ、」

先生「人間到る所青山あり、それは至極御結構なこと、」

尼「けれど、今日ばかりは、まさか御別荘、あらしに來た事を見つからうとはおもひ設けませんで……、實に、内證事は出來ないものですネ、」

伯「己はまた己が來たと聞いて、御來訪に來たのかとおもつたよ、」

尼「全くそうではないのですよ、昨日、爺やの所まで頼んでゐいて、今日親族の者を連れて、停車場まで参りますと、多勢出迎へて居るではありませんか、」

伯「それがどうしたと云ふのだ、」

尼「マサカ、私の出迎へとしては、あまり人数が多過ぎるともつて聞くと、只今殿様が、御客様と一所に御出の筈といふのでありませんか、」

伯「フウ、」

尼「御客様つて、今頃は議會も始まつて、皆様お忙しい筈なのに、何誰様だらうて言ひますと、先刻電報が参つた許りて、どなたか分りませんと言ふてはありませんか、」

伯「藝者でも、連れて來るともつてたか、」

尼「それ程の、御通人てゐらせらるゝともおもひませんでしたか、」

伯「ナアーニ、藝者などを連れて來て、お前様に見つかると、直に家内などに告げ口をせらるゝといかんから、そんな時は外へ行くよ、」

尼「けれど、まだ、何所に御妾宅が在るとも伺ひませんが……、」

伯「イヤ、己も全く藝者遊びをせんとは言はんが、只、花見、月見に行く様の心

持で、妾などいふ程いまだ深入をした事はないよ、もしも、現代に祇王の様な才色兼備の女が在つたらと探して居るが、さて、あれ程のをんなはないものだノウ、」

尼「アラ、祇王なんて、イヤナ事！、清盛に従つた婦人ぢやありませんか、同じくなら、祇王より佛御前の方が、よほどゆかしいではありませんか、祇王の取なしに依つて清盛に見え、而かも、その寵を奪つた事を心苦しい事におもひ、終に、祇王の弟子となつて、佛道に入つたといふてはありませんか、」

伯「禪尼などは、そんな幼稚な考へだから、何時まで経つても、黒隠禪師の允可を得ることが出來ないのだ！、」

尼「何故で御座います、」

伯「何故つて、よく胸に手をあて、工夫をして見い、少しく神経質の女なら佛御前の様な事は誰れにでもやれるだよ、他の場合にだつて、あんな女は、澤

山例が在るではないか、」

尼「へい、左様で御座いますかね、」

伯「凡て、人間といふ者は、順逆如何なる境遇に在りとも、境遇其儘を應用して活路を開くと云ふのが、えらいといふもので、それを、いたづらに、あせつたり、すねたりするのは、未だいたれる人とはいへないよ……、どうだ、分つたか？」

尼「へい、そして其順逆の御話と、祇王とは、關連して居るので御座いますかね？」

伯「まあ、逐次話すから、静かにきけよ、」

尼「けれど、早く允可を與へて戴きたいのです、」

伯「それで、祇王といふのは、元は、可然、志士の娘で在つたが、種々の錯雜した事情からして、とうとう白拍子となつて、京都へ上つて來て、彼女の優秀な唱歌と、舞とが、清盛の目にとまつて、終に一時の寵を得る事になつたのだ、……

序に云うておくが、當時は、歌というても、人の作つてふしづけけたのを單に暗誦するのではなく、みんな、自分で其時其場合によみ出すのだよ、」

尼「それは存じて居りますが、それから……、」

伯「やがて、清盛は、御氣に入りの祇王の事だから、其方の願は、何んでも叶へてやるとか、何んとか、よほどお安くない事を云うたとおもへ、」

尼「閣下は、其時立聞きでもして入らつたのですか、」

伯「ウ、無論ソウサ……、すると、祇王が云ふには、私の生れ故郷は、非常な乾地かはぢちで、年々百姓共の難義かたじけなくをするのが尠すくなくないから、どうか、それを救つてやつて下されといふ事になつたのだ、」

尼「マア……、」

伯「すると、例の土木好きの清盛の事であるから、尙更たまらない、直様よろしくといふ事になつて、直に一大工事を起して、とうとう、祇王の故郷に、一大運

河をこしらへ上げて、今でも、其地方の農民は、非常に便利を得て居るといふ事だ、」

尼「へい、それで、一體、祇王の所在は何處なので御座います、」

伯「何んでも、江州邊だと聞いたが、何處だったノウ、先生！、」

先生「何んでも、江州野須の近邊に、祇王村といふのが在つて、現今其所には、祇王寺といふ寺が在つて、今でも村人が年々祇王の爲に、盛んに佛事追福を修すると聞いて居りますが、大かた、木邊の錦織寺からは、そんなに、遠くならうとおもひます、」

伯「ソレ見い！、己の云ふ事は事實だ事！、」

尼「すると、祇王はきつと、今の栃木の田中正造さんの様な人の娘に違ひなかつたでしょうネ、」

伯「何しろ天下の大権を握つて居る清盛入道の前で、佛も昔は凡夫なり、我等も

終には佛なり云々と、喝破した位だから、栃鎮位とちつちんな勇氣は在つたらうさ、」

尼「祇王ばかりではなく、靜御前しずみごへにした所が、權威赫々たる頼朝公の前で、兄弟

とは云ふものゝ、むしろ頼朝が仇視して居る義經を慕つて、

「入りにし人のあとぞ戀しき」とか、

「昔を今になす由もがな」とか、

大膽不敵な事を、公然として歌つたのですからね……、あの時代の女は、どうしてあんなに氣概が在つたかと感心致しますワ、」

伯「ウ、」

尼「けれど、今時の宰相殿などは、國家の軍隊に妾宅を護衛させる位が關の山で、到底々々、いくら愛妾の願望にした所が、少し氣が利いた事や、入費のかゝる事なんかは、御取上げになりますまいネ。含雪將軍が、妾の所持品の貴金屬を、軍費に献納おさせになつたなんて、まづ／＼よほど例外の口でしょう、」

伯「そんな事が在つたのか？」

尼「私は、確かな人からさしましたワ、外の方達なんて、丸て御話にもならないとおもはれますワ、」

伯「併し、藝者の方にも、それ程の氣品を備へたものが、全くないからさ、」

尼「需用なき所に供給は止むで、今時、靜御前や、祇王の様な者が在つた所で、到底御最負にして下さる殿様はありますまいからネ、」

伯「大いに見くびるな、そして、柄にもない藝者の肩なんかを持つてはないか、」

尼「それは閣下、藝者だつて、始めから好んでなる者はないてしよから、一口にけなしも出来ませんよ、みんな、悲惨な事情のために、已むを得ずあんな家業を営む様になつたのでしよからネ、中には黄金のお蔭で花々しく御嫁入をなさる令嬢方より、むしろ、見上げた態度のものも、在らうぢやありませんか、」

伯「それは、全然ないとも云へんが、又、彼等の社會は、お前達が頭腦の中で想

像をつけて居るとは、全く趣を異にして居るからな、まだく、お前達は、ほんの御座敷水練で、世間の事は何にも知らないよ、」

尼「モウく、そんな藝者のお話なんかはよして、もう少し先生から、高尚な、有益な、御話でも承らうぢありませんか、」

先生「イヤどう致しまして、今のお話も、なか／＼有益な面白い御對話で……、」

尼「先生は、京都にお住ひだつて、随分所々の神社佛閣を御調べになつて、面白い材料を御待ちでしょう？」

先生「面白い材料など、云ふものは、そう、澤山あるものでは御座りませぬ、」

尼「本願寺へも、御出になりました？」

先生「ハア兩本願寺へも参りましたが、併し、妙な事は、西本願寺にある程のもの、必ず、東本願寺にもチャンとあるので、よほど不思議な現象です、」

尼、「へい、」

先生「西本願寺では、何とか云ふ小さい坊さんが、應接に出て、委しく説明してくれましたが、しかし眞宗に就いては、高田専修寺の方が、よほど材料に富んで居ることですから、拙者も、其の内是非、専修寺の方へ参りたいつもりで……」

伯「己が英國に在勤して居つた頃、西本願寺の留學生で、よく喋る、小さい小僧さんが居たが、彼は今どうしたらう？」

尼「本願寺では、多く小さい人が、妙に外國へ行つて居りましたとの事で、……左様、閣下の御滞英の頃といへば、よほど古い事ですから、今の雨田老でしようかナ、」

伯「雨田老なら、よく知つて居るが、……、尤も近來は一向逢ひもせぬが、尙當年の元氣が在るかどうか知ら……？」

尼「ハテ、何方でしようか、何分、私達が、まだ乳房にすがつて居つた頃ですか

らなあ……、もしや、黒杉さんでは御座いまんか、」

伯「ソウサ、たしか、黒杉とか云うた様だつた、」

尼「黒杉さんなら、どうして……、目下は、丁度、政府でいへば、閣下達の様な地位で、本願寺内閣の、黒幕で、元勳で……、」

伯「あの小さい坊さんが……、そうかな、」

尼「可愛相に、小さい……ッテ、そんなに被仰らずともよいては御座いませんか、山椒は、小粒でも、ヒリ、とするといふ諺も在るでは御座いませんか、」

伯「けれども、彼の人物が、本願寺の勢力者とは、始めて聞いたからさ、」

尼「本願寺には、内むきの人と、外むきの人と御座いまして、内治的の人は、いくら敏腕でも、勢力者でも、外へは、あんまり名が聞えませんで、」

伯「併し、己は七里恒順の名は知つて居るぞ、」

尼「恒順師！彼の方は、全く別ものですよ、九州邊では、本願寺様へ来るよりも、

萬行寺様（恒順師の寺）へ参つた方が、極樂へ近いというて居る位だそうですね……」

伯「そんな事もあらうよな……、博多の方が、京都よりも、よほど西へ寄つて居るからな、……」

尼「閣下は、そんな不真面目の事を被仰るから、到底、極樂参りなんて御出来になれませんよ……、そして恒順師は、もう疾に没せられましたよ、」

伯「そうかな、」

尼「單に、そうかなではあんまり、御話に曲まががないでは御座いませんか、」

伯「イヤ、己達は、個人としての、何某の有無を知るよりも、唯、何宗、何派が、どんな方針で、活動、もしくは、死動しどうして居るかを知つて居れば、國家の行政者として、事足れりだからな、」

尼「勿論、左様で居らせられましようが、死動とはあんまりな仰せてすネ、」

伯「ハハ……、氣にかけるな、實際、表面にいくら浮波うな々と運動して居る様でも、内に開祖の眞生命を傳へて居らぬ様では、死動しどうというても差支なからうかな……、」

尼「それを、可然、御指導あつてこそ、眞の行政者では御座いませんか、」

伯「政治家の指導を受ける様な宗教家！、それが、何んで、眞の宗教家と言へ様……、昔から、諸宗の開祖のやり口を見い！、みんな、當時の行政者や、學者の態度に慊あはれずに、別に道を説き、教を弘めたのでないか、己は、今時むしろ、己達を濟度してくれる様な人に逢ひたいと思つて居るのだ、」

尼「そんなに、澤山在つたら、開祖でも何でもありますまいからね、」

伯「だから、政治家の鼻息を窺うたり、俗世間の學者連の向背を氣にする様な事で何になる、よく己がそういうたと、誰れにでも逢つたらさういへ！……、歐羅巴でもジュジュイット派などの如きは、却つて諸大強國の政治家が、もてあ

ます程の、勢力を以て居るぞ!!!」

尼「そんな六ヶ敷い事を、誰に言へましよう、私は、唯、個人として、閣下の螺口先に座した因縁に、拜聴しておくまでですワ、」

伯「奈良朝が、あんまり支那を摸倣した、それに反動して、弘法や傳教が起つたのではないか、だから、今の時もうどうしても、西洋かぶれの黴菌を落す様な、何か新宗派、もしくは、新宗教は起らねばならぬとおもふがな、」

尼「どうも、祇王の實歴から、お話はとんだ所まで飛んで参りましたワネ、」

伯「己も、つひ興に乗つて喋つて仕舞つたアハ、、、、」

先生「イヤどうも、誠に壯快な御話を伺ひました、到底、京都などに居りましては、こんな御話は伺はれません、」

伯「東京でも、うつかり喋れはせぬが、まあ、別荘へ来た時や、婦女小供を相手の時は、また別だからな、」

先生「イヤ、天真爛漫の御話が、何より結構で、」

尼「伯爵の御話で、誠にどうも肩がこりましたワ、、、、どうか、先生からも、

京都の優美な御話を少し伺いたいもので、」

先生「御話と申して、格別、、、、」

尼「そんなら、今日は同伴者も在りますから、これで御免を蒙り、二三日中に、

また改めて伺ひます、、、：オヤ／＼オヤ、御話を伺つて居る間に、折角婆やがこしらへてくれたコ、ヒ、ヒ、が、みんな冷却して仕舞ひましたワ、惜しい事を致しました、オホ、、、、」

伯「夕飯でも喰べてゆくりして往くがよいぢやないか、」

尼「併し、今日はもう歸ることに致しましょう、」

伯「そうか、またゆつくり出かけて来るがよい、此頃は〇〇男爵も別荘の方へ来て居られる筈だから、紹介ながら遊びに連れて往くから、、、、」

尼「またどうぞ願ひます、……それでは、御免遊ばせ、」

伯「諾々、」

先生「イヤ、とんだ失敬を致しました、」

尼「ほんに、私こそ失禮を……、」(明治四十一年)

窮鳥懐に入る

拜啓……久しく御不沙汰致し候が、近日中少閑を得て二三日膝下にゴロ／＼
さして戴き度、決して俗界の話などは御耳に入れ不申候まゝ、此儀御許容願度、
參り候上は、いくら邪見な姉上にも、まさか窮鳥懐に入ると、逐ひ出してもし
給ふまじと信じ申候、敬具

ひとし合掌

かくの如き先ぶれありて後、訪ひ来れるは、金剛阿闍梨のひとし坊なりけり、

○「マアひとしさん、ようこそ！だが御來泊は平に御免蒙るとい上げて上げたのに、
とう／＼來たのネ、困つて仕舞ふワ、」

ひ「何もそんなに困らずともよいではありませんか、外の連中は兎に角、小生丈
は實家の關係からいうても、養家の因縁からいうても、公然、姉上を喰ひこか
す権利があるてはありませんか、」

○「それは、目下喰ひこかす権利が在ると共に、他日また、私を扶養すべき義務
も在る筈だから、私は喜んで歓迎すべき譯だけれども、世の中の事は、ソウソ
ウ天台的解釋許りには行きませんからネ、」

ひ「ハ、それは亦何故です、」
○「何故ツて、少し云ひ悪いけれど、仕方がない、大まけにまけて、言うてまか
せようか、」

ひ「閑話休題として、過日米峯さんに逢つて此地へ來る事を話したら、姉上にま

た何んでもよいから、新佛教の埋草を書いて送るやうに、傳言せよといふ事でしたよ、」

○「だつて、こんな田舎に閑居して居ては、全く東京の舞臺へ擔ぎ出す様な問題が何にもないんだもの、」

ひ「そんな事を云はずと、枯木も山のにぎはひだとおもつて書き給へ！書き給へ！！」

○「枯木や埋草は、一寸かさばつて困るからね、」

ひ「そんな事は、どうでも先方で始末をつけるだらうサ、」

○「それは此庵で釋尊降誕會を催した話でも仕様か、」

ひ「大分古い話ですネ、」

○「そこが枯木の所さ、」

ひ「兎も角も伺ひましよう、」 (明治三十九年)

佛 生 會

春も稍長けて、さすがいみじかりし梅も、いつしか若葉となりはてし、きのふけふは、たゞ、白き、緋き、桃の幾株が、時を得がほに匂ひいで、艶なる色を競ふぞ我庵の有様なる、折しもあれや、四月の始めは、春季休業に當りたれば、知れる誰彼の訪ひ來ませるも少からねど、前日より滞在せるは、例の不郤坊なりけり、

さて八日の朝、

○「今日は佛生會だからオ寺へ參詣して、甘茶でも戴いて來ようではありませんか、不郤さんは異教徒だけれどあつさあひなさい、」

不「叔母さん、小田原までわざわざ行くより、内て降誕會を催して、餘興に福引でもなさいな、そして隣村に來て居る、狂錯子や彼の友人達をも招ぶとして、」

○「左様してもよいけれど、狂錯さんも、やはりクリスマスチャンでしよう。」

不「クリスマスチャンでも、彼は私と同じく、決して偏狭でないのですから、喜んで世界の偉人の降誕を祝しますよ、それに、同宿の友人達は、みんな佛教徒だそうですから、」

○「それなら、私は何か福引の品を探しますから、不御さんは、御佛前の莊嚴を
して下さいな……。」

不「叔母さん、掛物は、やはり、あの狸の畫でよいのですか、」

○「まさか、今日はあれでは可笑しいワ……そう、今日は丁度、あの印度の阿育王が建てられたといふ、藍毘尼園（佛誕生地）の石柱の摺物がよいデシヨ、」

不「やはり、故叔父上が得られたのですか、」

○「ナーニ、叔父さんは、靈鷲山や鹿野園の方へ行かれたので、藍毘尼園は、

故清水泥佛子と、愚弟の嘔吐とが行つたのですがね、今はニポール王國の領分になつて居つて、無條約國だから、大分行くのに骨が折れたそうですよ、」

藍毗尼園佛生地碑

譯 文（本文は略す）

天祐を保全せる阿育王は即位の第廿年に於て釋迦牟尼佛の誕生地を禮拜せんが爲に此地に來り石柱を立て世尊此地に誕生したまふを證す、

不「掛物は之で上乘として、そして、御釋迦様は在るのですか、」

○「御佛檀の引出しに、ソーラ、天平時代の掛け佛とかいふ、一寸八分の座像が在る筈ですから、あれをかざつて下さい、」

不「叔母さん、感心に色々なものを持つて居ますね、」

○「それは、大和の法隆寺へ行つた時に得たものよ、」

不「なる程、一寸古雅なものですネ、」

○「佛様を、直に美術品扱いをするから、だから、異教徒は駄目よ、敢て崇敬の念を起す様でなくては、」

不「美術品なら、まだよいけれど御骨を骨董品にして、大さわぎをやる連中が、ソソジョ、ソコラに在るではありませんか、」

○「ソッヤー私にした所で、佛像を禮拜するのが直ぐに安心決定の正因とも、まさか思ひませんが、習慣上、佛像などに對すると、何とも云へぬほがらかな心持がするのですがね、之は全く習慣でしようよ、それに、昔の人は、一佛一體を彫むにも、鑄るにも、みんな信仰の上から、眞面目に苦心して成就したもので在るといふ事ですから、それやこれやも關係するのてしようよ、」

不「御花はどうしましょう、」

○「庭の桃の花と、それから、其所邊に行つて野花をたんと採つて入らつしやいな、」

不「御馳走は何にします、」

○「何ッて、急には何にも出来ないから、丁度オ向ふの別荘の、耶摩夫人へ徵發令を下す事にしましょう、」

不「徵發令ッてそれではアノ夫人も御招きするのですか、」

○「勿論、喜んで御出なさるよ、マア一寸招待狀の文言はかうだ、御さしなさいよ、」

文して申上候、さて突然ながら、本日佛生會につき、隣村の書生連五六人相招き奉祝會相開き度に就ては、是非々々、御子様御同伴、午後より御參拜下され度、但し、御佛前の莊嚴は、すでに用意し終り候へ共、何にても、書生連の口前に御供へ下され候はゞ難有存候、早々

不「僕はこんな御使は御免蒙る、」

○「ナアニ、隣村へ行く序におさんに持たせてやりますよ、……それで、佛様

の御供物は、この間から不御さんがねらつて居た、アノ、オ菓子箱を開くとし
ましよう、……それから隣村のオ客は、誰と誰だが、貴方手紙を御書となさ

S、

不「ハイ、狂錯子と怨々居士と、堺君と廣島君と、それから泉君に室町君、
之れだけです、……」

正午に近き頃狂錯子先づ來會あり、

○「オヤ狂錯さん、なぜオ一人なの！、皆さんどうなさつて、」

狂「吾輩は、御佛前に御供へ物を仕様とおもつて、やつと考へて、少し早く來た
のです、」

不「君何を持つて來た？」

狂「何だか當て、見給へ、福引用と二種同品だけんどネ、」

不「何といふ福引だ、」

狂「佛陀の慈光に心のもえて

歡喜あふる、夜もすがら」といふのです、

○「ソウ、まあお蠟燭ですか、どうも有りがたう、實は、常に使ふものでは、少
し小さくツて、困つて居た所ですから、」

不「ネ、叔母さん、狂錯兄は、僕が云つた通り、なか／＼雅量があるでしょう、」

○「ハア、クリスチャンの供へた御蠟燭ナンテ、ほとけ様も定めし珍らしいと、
思召すでしょうよ、」

* * * * *

やがて午後となり、皆々來集、最後に耶摩夫人は、五歳許りなるいと可愛ゆき令
嬢と、大きやかなる風呂敷包を持てる女中と伴ひて、參會せられぬ、

○「不御さん、御燈明を上げて下さいナ、そして、堺さん、貴兄はオ正席のもう

け役に、一ツ導師をして下さいな。」

堺「小生は、オ經は讀めないですが、」

○「ナァーニネ、始めの一句丈「光顔巍巍」と發聲して下さいな、後は私達がついて讀みますよ、」

堺「兎も角もオ經を貸して下さい、」

こゝに於て一同讀經焼香し、式は簡單なれど、之にて終りを告げぬ、

狂「今の御經は何んですか、」

○「眞宗では、淨土三部經といふを、所依の聖典として、その始めに、釋尊の略履歴が述べて在つて、その續きに今の偈文が在るのですよ、」

狂「一寸拜見、」

○「不卻さん、その訓點の赤い本の方を上げて下さい、」

狂「ナァール程、之を棒讀にせず、訓讀すれば、誰にも解つてよいてはありませ

んか、……なか／＼、高尚な優雅な文句が、澤山在るぢやありませんか、」

○「實は、この三部經の中には、往生淨土の一途が説いて在る許りでなく、ヨク拜讀しますと、修身齊家、それは／＼色々の教訓が在りますよ、」

狂「もう少し、素人分りのする様に、オ經を讀む工夫をしたらよさそうなものはありませんか……吾輩なども、毎々佛教式の葬禮などに會葬しますが、葬式といへば、誰しも心が落ついて居て、多くは餘事を思はぬものですから、アノ時は「ノ、ノ、ノ、マクサマ、ダ」や如是我聞などと呻らずに、一句でも、一章でも、來會者に理解の出来る言葉を聞かせたら、よほど傳道の一端ともならうと思はれますがネ、」

○「局外者の、その仰言やるのは尤もの事で、内輪でも始中終、其邊の話も在りますが、つまり、儀式習慣を重んずる、所謂、葬式僧の方では、一向革新の氣風に乏しく、さりとて、新進有爲の連中は、死屍の引導に重きを置かずして、

活佛教を鼓吹仕様とおもつて居ますから、其所が、局外からも色々の批評を受けつゝ、甘く一致改革が出来ぬ所でしようよ、

忿々居士「オイ、狂錯兄、例に依つて冥想的怪氣煽を吐かずに、祝賀會の眞意義を發揮すること、仕様ではないか、」

狂「釋尊降誕會に當つて、佛教傳道の法を講ずる、之れ眞の祝賀會ではないか、」
忿「そんなら、君一つ改宗して、大に佛日を輝かしてはどうだ、」

狂「チア、ニ、中に這入つて渦中に陥るよりは、局外から刺戟する方が、數段有效だと吾輩は信ずるよ、」

○「そうかも知れないワネ、兎も角、私も佛法弘通の一端として、皆さんに福引を差上げますから、表題を見て中の品を御判断下さい、おあてになつた方に、其品を上げますから、」

(一) 煩惱の垢穢にしみぬる人の子を

清淨身となさむとぞおもふ

(二) 化土往生の姿

(三) 光明無量壽命無量

(四) 佛出世前の人心

(五) 法の道たどり入るらん一里塚

かぞふる爲の枝折なりけり

(六) 櫻さく木の下かけをとめくれば

花ふき散らす春風ぞ吹く

(七) 佛陀の俗姓

(八) 深山路の谷の氷も解けそめて

春を待つなる鶯の聲

○「へーこれ丈です、」

堺「僕は一番の「煩惱の云云」は、「石鹼」だらうとおもひます、」

○「ハイ／＼當りました、」

廣「化土往生の姿ッて、どういふのです、」

○「之は他宗では云はぬ事ですが、つまり、死して直に佛様とならず、暫く蓮の蕾の中に籠つて居て、時機が來ると花が開いて、佛様となるといふのです、」

不「僕は、化土往生の姿なんて、あんまり六ヶしいから、希望の生活となさいといふたんだ、」

廣「そんなら分つた、玉子だ／＼」

夫人「私は、六番の櫻さくを半手巾だらうとおもひます、」

忿「何故です、」

夫人「だつて「ハナフキチラス」ですもの」

忿「ナァール程、……そんなら、拙者は、深山鶯を切手だとおもひます、」

○「あたりましたハルヲマッてすからね、」

狂「佛出世以前の人心、何んでも悪いもの、黒いものに違ないが、何んです、炭ですか、」

○「マア／＼似た様なもの、炭團です、」

室町「佛陀の俗姓は、誰れにも解るシヤクシ(釋氏)に極まつて居る、」

○「ツツ／＼……ヘー差上ります、」

泉「光明無量」は蠟燭、「壽命無量」は鶴龜の菓子か玩弄品、」

○「少し違ひますが「マツチ」と龜の繪はがきてす、」

夫人「五番の法の道」を娘の分に戴きたいとおもひますが、枝折ですか、どうも枝折にしては、あまり明らさまに過ぎてゐます子、」

○「これは、少し「コジツク」かも知れませんが、お數珠です、丁度小供用の赤いのですから、御嬢さんに御上げ下さい、」

不「耶摩夫人の御女中には之がよいでしょう。」

狂「君何んだい。」

不「大和島根に女が御座る

櫻ばかりが花ぢやない」といふのでちかめの面よ。」

狂「可愛想に、誰の出品だ。」

不「廣島君だよ。」

○「オヤ／＼ひどいの子、内のあさんにもやつて下さいな。」

不「来るか／＼と濱に出て待てば

濱の松風音ばかり……サア之はあさんの分だ。」

○「何もないのでしよう、音ばかりで、」

忿「拙者の出品ですから、確かにあります、開けて御覧なさい。」

あさん「オヤ／＼狐のオ面で御座います。」

忿「來ん／＼といふのです、どうです、よほど考へたものでしょう。」

夫人「皆さんは、オ人の悪いの許り出しなされるのネ、私は又大學の學生さんなんて、もう少し上品な御智慧が御在りなされるとおもひましたよ、せめて濱の松風を笛にでもなさればよいのに。」

忿「何しろ、にはかな御使ひては在りますし、それに拙者等は試験の準備に忙しくて、到底福引などに腦を使ふ餘裕が無かつたのですから、平に御勘辨を願ひたい、……來て上げた丈でも、よほどのオ義理を立てたんですからネ。」

○「どうもありがたうよ。」

不「叔母さん、それでは最後に、僕と貴方で耶摩夫人の御出品を戴かうてはありませんか。」

○「そうネ、題は何です、」

君はその岸の青柳我はまた

下ゆく小川かげをうつせよ、

○「鏡らしいから、私が戴きましよう、」

不「村雨のふりみふらずみ打かすみ

蘆間を分けて落つる雁金、

之は、確かにオ菓子[○]の落雁[○]に相違ないから、僕が頂戴する、

○「さあ、之れて福引は終りましたから、オ茶に致ましよう、」

夫人「どうかつまらぬものでも、皆さんに御上げ下さい、」

不「サア〜皆さん、夫人御土産の蜜柑に、オ菓子、叔母さんオ手製のまづい御す

し、何んでも御注文に應じますぞ、」

かくて一同食卓につきつゝ、春の日の長きをも覺えず、互に語り暮せしが、中に

は耶摩夫人の、今日狸婆にはかられて參會せられし事を、いと可笑しく興ありげ

にいひ出て、其徳を賞讃へらるゝ人のありけるにぞ、談は益々佳境に進むのみ

なれど、さりとは、埒をいそぐ群鳥の聲に誘はれて、みなくかへり給ひぬ、
後には、たゞ磯の松風の淋しくふきすさぶのみ、

* * * * *

○「サア之れて私の佛生會の話は済んだから、今度はひとしさんの密部修行のオ話をして下さいな、」

ひ「密行の事は、師と弟子でなければ傳へられません、」

○「マアそんな頑固な事を云はずと、ざつと差支のない分丈けてよいから、そこ

は姉弟のよしみに、是非きかせて下さいな、」

ひ「そんなら、どうせ内容は、姉上などの様な、御粗末な頭腦には分らないか

ら、ざつと形式的のアウトライン丈を話しましょうか、」

○「ハアどうぞ、私は又眞言祕密だの苦行練習だのなんて、どんなものかと思つて、聞せないと云はれると尙聞きたいのよ、全く好奇心だけれどネ、」(明治卅九年)

密修練行

ひ「所は大比叡の山上、松杉ものふりて晝尙ほ小暗きあたり、其處に一字の堂あり、聖尊院と名づけて、これ實に百有餘日の間、我等が煩惱具足の身を以て、忝くも大日如來の至親眷屬となつた紀念の道場とおもひ給へ、脚下萬仞の谿間より、夜な／＼猿猴の叫びの聞ゆるなどは、時に凄絶なるものさネ、」

○「マア幽凄な光景ネ、そして御師匠さんも誰も側に御出なさらずに、一人限りて行を修するのですか、」

ひ「無論密行を修するには、先づ第一に師の阿闍梨を撰び、お授かりと申して豫め傳授を受けておいて、あとは獨りてやるのです、そして施主がなければやはり出来ませんよ、……施主は御承知の通り、幸にも妙雲老尼公を得、阿闍梨は忝くも山門第一の碩徳○○大僧正が應じて下さつたのですよ、」

○「それは何うも、實に大したものだつたワネ、」

ひ「イヤ彼の時の事は實に不思議ですよ、他宗で、殊に自力雜行を嫌ふべき眞宗の者が、たとひ形式丈にもせよ、密部修行をしたいといふのに、許して下さる阿闍梨も阿闍梨だし、又その施主が眞宗の篤信者といふのも不思議ではありませんか、」

○「元より妙雲尼公は、貴方が密行を修した結果、加持祈禱をしてもらひたいでもなし、又其方法を聞きたいでもなし、たゞ虚空裡に向つて御賽錢を投げるつもりだから、決して結果の如何は問はないが、偶々、之が新舊佛敎の思想を交換連絡する緒とでもなれば、望外の至りだというて入られたのだネ、」

ひ「小生も、全くそういふ施主でなければやる氣にもなれなかつたのですから、全く不思議の因縁といふより外はないのでしよう、」

○「密部修行の爲に、エライ不思議に勿體がつく様になるが、つまり内外の諸因

縁が一致した迄だらうよ、……それからいよいよ修行の事はどうなるのです、」

ひ「小生の修したのは四度の加行といふてしたが、それには各、前行がありましたね、第一の十八道といふの、前行は、三千禮といふのでした、」

○「四度なら、六度萬行にはよほど数がまだ足りないのですネ、」

ひ「菩薩の六度萬行の方は、全く之れと立て方が別なんです、そして禮拜というたとして、單に頭蓋を下げる丈の禮拜ではなく、一々三千佛の佛名を稱へて、五體投地禮といふので、五體を地べたにつけては拜するのです、」

○「随分厄介ネ、」

ひ「だから、始めの三四十遍は、身體に感覚が在りますが、だん／＼後になると、身體がしびれて夢中でやるのです、」

○「随分野蠻的ネ、そして一日にするのですか、」

ひ「どうして／＼、一日になんて出来るものですか、當り前は百日でも、二百日も、何か靈感の顯はる／＼までやるのですが、私は大急ぎで一週間に禮し終つたです、……それから、一寸申上げて置きますが、この修行中は、一寸着物を着かへるにも、御飯を喰べるにも、廁へ行くにも、行住坐臥、一々印相を結んで、咒文を稱へて、心に觀想と云ふものをやる、之が慣れぬ内はなか／＼面倒なものです、又、仲々慣れられもしません、」

○「それからどう進むのです、」

ひ「そうです、小生は特別最急行でやりましたが、行法の順序はまづかうです、十八道前行——一七日、十八道正行——三七日、胎藏界前行——一七日、胎藏界正行——三七日、金剛行——一七日、金剛界正行——三七日、護摩前行——一七日、護摩正行——一七日、マア走つたものですネ、」

○「一寸そのやり方をさ／＼たいものだネ、」

ひ「一寸位では到底分りませんが、十八道の行法といふのは、マア代數の方程式みたいな様なもので、一つのかたですネ、併し、かた丈では眞劍勝負にならんから、やはり流儀に依つて違ひもしますが、始めは不動さんなり、觀音さんなりを本尊としてやるのです、夫れて之が熟しさへすれば、本尊は何佛、何菩薩にかはつても、唯、根本の印相や咒文を取りかへさへすれば、同じ行用で修されるのですが……此行法に就ては、歴史上色々の問題もあるのですが、姉上が又笑ふから止めましょう、」

○「笑ふ段ではない、眞劍勝負で聞いて居るのですよ、……其次は？」
ひ「其次に修する胎金二界の行法は、之も台密、東密と、流儀に依つて次第にも色々異同がありますが、つまりマア、顯教の術語を藉つて一口に云へば、金剛界といふのは、智で胎藏界と云ふのは、理ですがネ、そこで、金剛界の曼荼羅といふのは、大悟界に於ける智的活動の表彰で、それが、迷界から出立して、

悟界に入る向上的順路と、悟界から出立して、迷界に出假する向下迷路との二様のカーレントがあつて、此二個のカーレントを、毘盧遮那如來、即ち、絶對智の活動としてサ、それを表章的に繪畫に寫し出したものを金剛界の曼荼羅といふのです、勿論、前申上げた通り、之は顯教的の説明で、其實、祕密眞言教の教義から申しますと、之が決して譬喩でもなく、表章的繪畫でもなく、曼荼羅其まゝが事實であつて、智的大悟界の實象であるのです、」

○「ハハア、それで胎藏界の方は、又何か別な理屈が在るのですか、」
ひ「ナアニ胎藏界の方も同じ様な理屈で、金剛界が絶對智の實現であると同時に、胎藏界は絶對理の實現なんです、専門的の口調でいへば、大日如來の自證寂然界の相當を、示したものです、」

○「語がいろいろ込み入る様だが、阿字本不生など云ふ事とは、どう連絡がつくのだね、」

ひ「つまり、胎藏大日の種子が阿(ア)字で、金剛大日の種子が鑊(カ)字と云つて、今日の口調で云へば、此の二字が兩界大日の標章なんだがね、これも、宗義からは決して標章などは云はず、そんな、こんな、間違ひのない爲にと、大師もわざ／＼聲字實相義とか、伝字義とか云ふ著述をして、文字即解脱を論明された譯さ、……併し、小弟が今御話して居るのは、云はゞ眞言祕密教のピエーアー、フキロソフキーで在るので、そこへ、ブラクチカル、ドクトリンの阿字觀を持ち出されては、味素も苦素も一所クタと云ふものさ、」

○「それから前行、正行といふのはどういふのです、」
ひ「つまり、豫修と本課といふ様なもので、日數は「悉地成就を期す」というて、或る靈的成績を感得するまでやるのが上代の法則なんですが、中古以來、何もかもフォーマルになつて仕まつて、小生の様に、僅かの日數で切り上げる様にもなつたのです、」

○「悉地成就とは？」

ひ「さすが姉上も、これは一寸譯りませまい、之は眞言坊さんの口調ですが、悉地とは梵語のシドधि (Siddhi) の發音を示したもので、悉地成就！、つまり、重ねの重箱と云つた様な御ゴ丁、寧な云ひ方サネ、之も古來のくせですから、歴史的に寛容して御さゝなサイ、」

○「それからどうなるの、」

ひ「右の行法をかたの如く終つて、終りに護摩の修行に移るのですが、勿論、凡ての修行中は、食事は朝と晝と、二度攝取するぎりが方規で、殆んど道場へ立籠りつゞきて、偶々道場を出たからとて、厠に入つてまで、念珠つまぐつてナーマーサーマンダの咒文を稱へつゞけるのだから、本氣に曼荼羅界裡の人となつたつもりでやるのサネ、」

○「チット集鳴的ネ、」

ひ「巢鴨なんて、そんなオ安いのぢやありませんよ、だから御覽なさい、不動さんの頭の上に蓮座があるでしょう、あれはネ、不動さんの誓願で、密行練修の行者をして、我頭上の蓮座の上に坐せしめ、一切安穩にして祈願悉地せしめんといふ譯なんだから、エライコトになるのサ、」

○「何しろ本尊の頭上に乗るのだから、尋常一様の沙汰ではあるまいが、つまり、どうすれば、生身後光を放つの奇を演ぜらるゝのだネ、」

ひ「身口意の三密相應すればなれるといふのですがね、之を當世流に云へば、自我が絶対我に一致し、更に一切の他我とも融合して、三我の三密が、三々平等になる所を云ふので、其唯一の方法を具體的に言ひ顯したのが印明觀想ですがネ、委しく云へば、口に稱ふる咒文が明で、身體や手足のとなへが印相で、それに意識の上の觀想と合せて三密に身心を凝らすのさね、」

○「何だか、あんまり六ヶしくて、一寸分り悪いツネ、」

ひ「近い所が眞宗ていへば、口に報恩の阿彌陀佛を稱ふるのが明で、心に如來の慈悲を念ずるのが觀想で、手に合掌するのが印相さ、」

○「門徒物知らずがオ得意の所、そんな事をいふと、外道だなんて、御宗内の御學者様方に叱られるよ、」

ひ「叱られたら莞爾として微笑する迄サ、……法は本來融妙のものぢやありませんか、」

○「成程そいふ譯かネ、……それから護摩とは火祭法だとかき、ましたが、何を焚くのです、」

ひ「乳木、檀木、芥子、胡麻、粳米、五香など、色々焚きます、……それから、普通の人は、護摩とさへいへば直に惡魔降伏、怨敵退治の護摩のみ聯想しますが、護摩にも、息災、增益、降伏、鈎召、敬愛と先づ五通りあつて、それく作法が異ふのです、」

○「一寸區別をさかれませんか。」

ひ「一寸は話し悪いですが、護摩は今云つた様に五種にも分けますが、更に之を事法と理法との二様に分け、又内護摩、外護摩といふ區別の仕方もあるのです。」

○「そんな専門的な事は却つて分らないから、極々簡単にさげばよいワ。」

ひ「まづ息災護摩とは、天地の不祥、内外の厄難を拂ひ除ける様に祈修するので、之が事法の息災護摩です、理法の方は、内面の悪業煩惱といふ様な悪災を拂ひのけるので、つまり理法護摩は内觀的のもので、事法は客觀的と言へば言ふのです。」

○「増益とは？」

ひ「増益護摩と云ふのは、利益とか名譽とか、地位とか、生命とかいふものゝ増進を祈るのが事法の増益、佛道に進む因行の増進を祈るのが理法の増益なんて

す。」

○「何んでも、慾ばつて祈る事も出来るのネ、随分だワ！」

ひ「それから、降伏護摩でも、やはり、所謂、外部の怨敵退治、惡魔降伏の祈願法が事法で、三惑五性の心靈的怨敵、即ち内面の五魔三障を拂ひのけるのが理法の降伏護摩です。」

○「人間若し、内面の魔障を悉く拂ひのけて、白玲瓏なるものに成り終つたら、人世は實に詩趣に乏しくなるだらうネ。」

ひ「そんなませつかへしを言はずに、眞面目にお聞きなさいよ。」

○「イヤ、實際そうもつたから一寸聞いて見た丈、決してませつかへしではないのよ、……それから鈎召なんて、一寸私達は見た事のない熟字だワネ。」

ひ「之は、一旦向ふの岸に流れたものを、此方へ鈎で引つぱり戻すといふ様な意味の字で、事法の方で云へば、何かの間違て監獄へでも投り込まれた様なもの

を救つてやる爲に修する護摩で、理法の方では、六道輪廻の衆生、自覺を與へ、向上的反省を喚起するなどは、最も適切な鈎召的なものですネ、」

○「すると、我々は、先づ向上反省すべく、此護摩の御厄介になる口かネ、……もう一つ最後の敬愛護摩といふのは？」

ひ「家庭、友人、師弟等の平和を計り、兩者間の情交を圓滿ならしむる祈禱法が其事法の敬愛護摩で、自己の心靈上調和を計るのが理法敬愛護摩です、」

以上申上げた通り、種々の護摩がありますが、つまり其修法上にも色々と差異が在りますし、又、燃料もそれ／＼異ふのですが、一寸いへば、敬愛護摩の時には、花木の燃料に用ゐ、降伏護摩を焚く時には、苦木、刺木というて、何んでもおそろしうなものを用ゐ、本尊も觀音様の様なやさしいオ方を祭つたり、忿怒尊つて、五大明王の様な恐い方を祭つたりするんです、其他、方角とか、時日とか、色彩とか、形體とか、護摩を焚く爐まで違ふのです、こんな事はなか／＼込み入

つて非常に複雑なものです、今の普通の坊さん達のやるのは、大抵そこ／＼に、譯も何も分らずに燻いぶしつける丈のが多いとの事です、」

○「それぢや、丸て事火外道の様なものですネ、」

ひ「つまり、事護摩、一邊ではそんな様なもので、無相、三密の理護摩が伴はなければならぬのです、といつても、小生なども、かたをやつた丈、なか／＼その本物といふのではありませんがネ、」

○「イヤ、だん／＼といはれをきけば、有り難くも、おそろしくも感じますが、御講釋はまた他日席を改めて伺ふとして、一寸、其時の感じはどんなものですか、とても我々凡夫にはおもひ計れませんかネ、」

ひ「何も、姉上にミスチックを鼓吹する譯ではありませんがネ、時に密行といふものは、仲々趣味の在るものですよ、特に護摩法なんかには詩的の事が度々あるのですよ、或る場合には、小生の様な冷頑な頭にも、嗚呼我等にして、若し

露伴の筆あらしめばとちもはしめましたよ、」

○「それがまたどんな時にネ、」

ひ「空山無人の山奥で、萬籟寂然たる朝三時頃から、一堂に靜座して、印明觀想に瑜伽の觀念を凝らし、心靜かに護摩を焚き、いよ／＼火の盡き、祈修の終る頃やう／＼東の空がしらみか／＼つて來て、堂の外部の空隙から一導の曙光がさし込むと、今迄焚いた護摩の烟が、靈鷲として堂内の上半部に密集して、靜かにたゞよふのが、一種得もいへぬ清高な色を帯んで見えて、さながら紫雲にても包まれた様な氣持がして、何とも云へぬ詩趣、禪悅を感ずるのです、而も正面には、忝くも山門西山流灌室の秘佛たる興教大師作の有名な不動尊を安置して、前には六尺四面の護摩壇が在つて、その壇の四方の柱から柱には、五色の線が張り渡して在つて、壇上には種々の供物、供華や、修行に入用の金色燦然たる器具が並んで在つて、四方の隅には常綠色のオ花が、如何にも清淨に立て、在

つて、其間に青白色の燈臺が、や／＼物凄いい光輝を放つて居るのです、もとより修法の初めから、道場の上下四方に重々の羅網を（觀想的に）張り、其又外部には火界の印を結んで結界して在るのですから、全く塵界とはへだ／＼つた、別世界の心持で修行して居るのでは在るのですがネ、」

○「マア大變な御準備ネ、私達は、破れ垣一重で、大丈夫、盜賊も何にも來ないつもりで、安心して暮して居ますがネ、」

ひ「其代り、身中が煩惱の火宅ぢや仕様がなないぢやありませんか、……小生等の其時は、丸て人間ではない、三密平等の大日如來同様なんですからネ、」

○「ひとしさんもそれ丈修行すれば、大丈夫大日様のオ淨土へ行けるワネ、」

ひ「馬鹿な事を仰言やい、眞面目に學術上の必要に逼られたのと、且は心靈上の参考とも思つてやつたのです、極樂は愚爺痴婆、マッタ、姉上など、一所にやはり彌陀の淨土へ行くつもりです、」

○「曾て愚弟の嘔吐が、大學林で、安心試問に及第して、眞宗の學位を授かつたときに、僕はもう極樂行の切符を得たから大丈夫、極樂の門衝を通行する権利があるというて居ましたが、ひとしさんも、やはり、あれをも持つて居るのだから、阿彌陀様なり、大日様なり、お好み次第のオ浄土へ行ける譯さネ、」

ひ「行けるか行けないか、我等が往生は、たゞ彌陀一佛に任せ奉つて在るから、今更兎や角おもひませんが、實際二月の寒天に、毎朝、夜半の三時前に起きて、山奥の谷川へ行つて閻伽水を汲んで身を淨め、供華を、谿間道なき所に探つて、道場莊嚴の準備にかゝる時などは、頗る詩味も感じますが、サテ一方には、つく／＼聖道自力の法も容易のものではないとおもひましたよ、」

○「それで修行は護摩の一段で全く終つたのですか、」

ひ「小生が、過般修行したのはこれ丈ですが、最後に所謂、祕密灌頂といふのがありますが、それは儀式が複雑なものと、それに要する費用の餘り多量なので見

合せました、其内、叡山で大法會でも在るときに參詣して、折角の事にそれも受けて見たいとも思つて居ます、何少し前行さへすれば、一晝夜か二晝夜で終ります、まづそれで密部修行の一段落がつくといふものです、それさへ仕舞へば、まづ所謂、大日同體になれる修行が濟むといふものです、」

○「マアソウ、これ丈伺つて私もよほど大日の御浄土へ近くなつた様だ、」

ひ「一夜の座談でオ浄土が近くなる位なら、誰も心配はしませんが、マア實際やつて見ると、思つたよりも苦しいですが、併し、小生は確に腦の問題を腦のみ解釋するといふ外に、是を體軀に依つて換得する必要も在るといふ事を知つたです、之は容易く公言出来ないとしてますが、この點に於ては、師の大阿闍梨台下、並に施主の妙雲尼公に向つて、多大の感謝を拂はねばなりません、」

○「施主と阿闍梨とを並べ稱せらるゝが、一體あんな澤山なオ金を何に使ふのです、」

ひ「佛前の莊嚴や、澤山の供物供華などを毎日新たにし、それに種々の貴重な香木などを焚かねばなりませんのが、何しろ百有餘日も續くのですから、昔から施主のない爲に意を遂げなんだ人がいくらも在るそうですよ、」

○「そうすると、佛道修行も、やはり外護の士がなければ出来ない譯ですネ、」

ひ「ルーテルの如き一代の偉人でも、若しフレデリック賢侯が無かつたなら、あれ丈の大事業は出来なかつたかも知れませんかやありませんか、」

○「そんなら、此後も精々ひとし、さんの爲に、外護の士を探しましょうよ、」

ひ「といへばとて、たとひ、今、岩崎さんの財産をもらつたからとて、直に宗教改革を起して、ルーテルになれませんが、つまり種々の機縁が熟さなければネ、……しかし、精々今後も勤勉して、皆さんの御芳志に負かぬ様に心がけるつもりです、」

○「そうして、一日も早く私達を本統のオ浄土へ連れて行つて下さる、」

ひ「そんなイゴイズムな外護者は助けて上げません、」

○「それ所ぢやない、無縁の衆生さへも救ふといふ本願でなければネ、」

ひ「マアそうしましょうよ、」

二人アハ……、オホ……、

かくて計らずも互に興に乗じて語れる程に、夜もいつしか更けわたり、二十日あまりの月はやう／＼にさしのぼりて永劫の光を放ち、青葉をもれくる風も何となく異香を薫じ、打ち寄する波の音さへ研えまさりて、げに塵の世にありとしもおぼえぬ其夜の様なりき、(明治三十九年)

戀の片影

×「叔母さん、近頃何か面白い通信は來ませんか?」

○「別段ネ、」

□「ソウダ、叔母さんの所へは、何時もよく妙な手紙が集るから、是非見せて貰はうよ、」

○「そんなに右左からせがまれては、全く困りますネ、」

×「ナァ、ニ、其所邊に在るのでよいですよ、」

□「ヤア、其第一號は、是非僕に讀ませてくれ給へ……、」

文して申上候……あはれやなまじひに學の窓にいそしみし身の、はしなくも哲學——宗教——藝術などの聲々に誘はれ候より、そをなさげの友として、何心なく此所までたどり候へ共、夢かや、其影も跡なく消えて、今は唯、花も咲かぬ、鳥も歌はぬ、廣き荒野にさまよふ心地のせられ候、何處にゆかば、久遠の花の匂ひ候や、なつかしき蝶鳥の舞ひ居り候や、いざや、道知らぬものゝ爲に御教の手を下し賜はずや、折々は、桑木先生の「孤獨生活」の様なる思の胸にせまる事ありて、己が心の底の眞底に確かに安心する住家を見出し度候、こは狂ならむか、

さらば狂なりとの、御叱りの一言をだにも賜はり候へば、如何に嬉しう候らはむ、

底しれぬ蒼海原は墓所

永久にかくれて一人泣かむか、

あゝ、されど、只今の所、底の藻屑と消え果てなむ其覺悟すらも無之候……、

泡沫女

陽炎先生御前に

叔母上よ、笑ひ給ふ勿れ、昨日小生の不在中に、一妙齡の佳人の我宿に尋ね來りて、右の手紙を置き去り候由、誠に一驚を喫し申候、子供らしと笑ひ給ふやも不知候へ共、實は、小生も、青春の血潮未だ全く氷結し居らざるものと見え、さすがに我胸は躍り申候、丁度晚餐前に披見致し候に、落ちついて喫する能はざるの奇觀を呈し候、何となく嬉しい様な妙な心持が致し候、乍去、翻つてつらく考へ候に、こは決して我胸を躍らすべし妖艶なる問題にては無之、

大に靈性的に考究すべき求道問題にあらずやと考へられ候、如何のものに候や、敢へて海に千年山に萬年の老劫なる叔母上に問ふ。……近頃こんな手紙が舞ひ込む様にては、小生も本年中には、いよ／＼スキート、ハートを迎へ得る前兆にあらずやなど、ひそかに喜悅罷り在り候、呵々

陽 炎 生 拜

叔母上様

- 「成る程妙な手紙ですネ、」
×「それで叔母さんは、どういうて返事なされたの、」
○「どうッて、貰つた本人にさへ解らないのを、いくら私だつて、判断の下し様もありませんワネ、」

×「けれど、女の心は女に解りそうなものですネ、」

○「唯佛與佛乃應知見といふ事が在りますから、オ婆さんが、極樂參りをしたい

といふ心意氣なら、私にも直によろしく察する事が出来ませうけれども、今時の突飛な御嬢さん連の意中なんて、どうして私達に分るものですか、」

×「そうして、陽炎君は前から知つて居る婦人なんてでしょうか？」

○「どうも、此方では知らない人らしいのですがネ、」

□「陽炎君はまだ、獨身なんでしょうか、」

○「ハア、まだ獨身では在りますが、もう以前に赤門を出たので、随分求道問題に解決を興へる資格が無いとも云へませんからネ、それに一方には、立派に許嫁の妻君の在る事を、誰知らぬものもないのですからネ、」

×「全く妙な手紙ですネ、そして陽炎君は、何と返事をしたのでしよう、」

○「マアダ、宿題にして考へて居られるらしいですよ、」

□「成る程宿題として置くのも面白いネ、」

×「僕もいつか或る婦人から妙な歌をもらつて、判断に苦しんだ事が在るがネ、」

□「苦しむなんて、あんまり、意氣地が無さ過ぎるではないか、諾否の二言で済む事でないか!」

×「世の中の事は、そう簡単に行けば譯はないがネ、」

□「一體、全體、どんな歌だへ?」

×「一夜たゞ御夢に入らむ幸あらば

露の身あした消ぬる厭はず、

こもりゐの悶えは多しこれやこの

人の世遠く夢みつる罪、

といふ二首よ、」

□「そして君も返歌をやつたのかへ?」

○「いくら三角さんが、物好きだつて、まさかやりはしなざるまいよ、」

×「所がやりましたよ、」

○「マア驚きましたネ、何といふ歌をおやりになつたの?」

露しめる木下小道の花草に

森のあしたの歌はたづねよ、

知らぬ道知らぬ野山を迷ふ子に

兄と呼ばれし我涙かな、

というてやりました、」

○「よほど親しく交際なされた婦人ですか?」

×「ナァーニ、名前丈は雙方で聞いて居たし、寫真では見た事がありますが、まだ逢つた事はないのです、」

○「其後、先方から、又何とか云うてよこしましたか?」

×「否々、それから、いろんな事がつゞいて、お互に住所不明といふ譯になつたのですから、それぎりでしたが、併し妙ですネ、其後久しく経つてから、其婦

人が、他所へ嫁したと聞いた時には、僕も思はずハツト胸が躍りましたネ、けれどやはり先方でも今尙僕の事は忘れては居まいともおもはれるですがネ、

□「君は馬鹿に自惚ラハ惚が強ハいネ、其様な一時に狂熱的な態度を取る様な婦人は、直に冷却して、又他の人に熱するものだよ、今頃はすつかり君の事など忘れて、立派な主婦になつて居るだらうから安心し給へ、もとより逢ひもせんのではな
いか、」

×「それは左様ヨウかも知れんが、僕も時々は餘所ながら會つて見たい様な稗氣ヒョウキもするし、折角の人の好意を無にしたとおもふと、どうも氣の毒な様な感じもするんだがネ、」

○「三角さんみた様な常識の一角の缺けた人に、逢はねばこそ、優しい歌も贈つたものでしようが、もしや一度でも會見したら、直に跣足で逃げ出して仕舞ふに極つて居ますよ、そんな下らぬ事を氣の毒がらんでも自分で進むべき道にさ

へ進めばよいではありませんか、そんな事を考へて居ると、今度は自分自身が迷子になりますよ、」

×「迷つても、迷ひ甲斐のあるものに迷ふならよいとおもひますがネ、」

□「そも／＼男女の間など、云ふものは、進んでハートの友になるのも、退いて永久の他人になるのも、實に間一髪のもので、其所へ行くと、主義も理想もあつたものぢやない、全くチャンスだからネ、」

×「けれど、チャンスなどで結合したものは全く不幸だネ、僕は理想的戀愛と、ロマンチック、ラブと渾然一致して、靈と靈との融合が土臺とならぬ以上は、結合それ自身が全然無意義だとおもふがネ、」

□「意義だの、無意義だのとは、近頃流行る言葉の様だが、一體理性的戀愛とかロマンチック、ラブとかいふ事は、抑も、字引丈に生きて居る言語の差別では在るまいか？」

×「そう云つて仕舞へば、何事も型無^{かたなし}だが、つまり理性的とか、ロマンチックとかいへば、六ヶ敷きこえるが、平たく云へば、尊敬と可憐と二ツの情の全然一致融合した戀愛を味ひたいと云ふのサ、」

○「すると私達が昔御師匠様方に、よく聞かされた、敬して遠ざからず、愛して狎れずといふ譯ですかネ、」

×「眞理に古今なしさ、唯、昔は形の上を主とし、今では心の方に重きを置く所に、少し語韻の強弱が在ります許りサ、」

□「それで、敬愛の差はどんなだと君は云ふのだネ、」

×「左様サ、唯、エライ人と尊敬する許りなら、友達の交際で澤山だし、唯イトシイとおもふ丈では、妹の御相手を仕て居る様で、どうも物足らぬ感じがするではないか、この二ツが満足してこそ、始めて夫妻たり、半身たる必要と、価値とが、生ずるといふものなんだ、この根本のないのは功利的結婚とか、肉慾的

結婚で、必ず終に色々な不幸が湧いて来るに極つて居る、よく世間で、男子の放埒とか、女子の不心得とか、元を糺せば無理はないサ、皆んな眞意義に立つた結婚をせず、眞正の敬愛の融合より溢れ出る幸福を味はないから起る事なのサ、」

○「三角さんも、理窟丈は半人前こねまはす事があ上手だが、一體よく世間では、妻君を事業の内助者として迎へる人が在りますが、貴方の御宗旨では、そんな人は五十二段のどの邊に札がつくのです、」

×「それは、その人の境遇に依つて、一概には云へませんが、併しながらもしも深厚なる愛情の基礎がなくて、單に内助の爲のみといふのなら、矢張功利結婚の御仲間で、結局、人世の立派な正覺は得られませんまいよ、そんな連中は、人情界のカーライルが居たら、定めし棍棒で背中を見舞はれるに違いないです、」

□「ソウ、いつか齋藤緑雨が云つたつけ、今の結婚は、料理屋に登らうと思

つたが財布の都合で、蕎麥屋で済まして置くと同じ流義だつて、マア君も善い加減に見切りをつけて置かないと、蕎麥屋どころか、屋臺店にさへありつかれない様になるよ、」

×「大丈夫!!!、テニスンなんかは、三十一歳で約束して、四十一まで待つて居たてはないか、アーザイングは、死んだ結髪ゆいまつげに一生貞夫を立て通したてはないか、全體、日本の人間は譯が分らぬよ、男も女も、年頃になつて結婚しないのを恥の様に思つて、自分等が敬愛する價值のないものと結婚するのを、少しも恥辱と思つて居らぬのだからネ、實際意義在る獨身や、理想の伴うた失戀は、普通の結婚と比べて如何様に幸福か分りやしないよ、君も、これから事業界に切つて廻るのだが、餘程用心をしないと、つまらぬ事に眼がくれて、人生の最大幸福を誤るかも知れないぜ、大に氣をつけ給へ、」

○「呆れますネ、完全な常識を具備そなへた方しかたさんが、空想一點張りの三角さんに御注意を受けるなんて、」

□「無論、抽象的には三角さんの言葉の通りに相違ないが、具體的にはそう、安く問屋で卸してくれないからネ、若も人間が愛に活き、事業に慰み、信仰を歡ぶといふ様な、三拍子揃つた境界に居る事が出来れば幸福此上もないがね、徳富蘆花の云草ぢやないが、「古今六千年、人間は未だ半獸の境を脱して居ないのだから」此娑婆世界に於て、理想的結婚だの、絶對的幸福だのなんては、到底望むべからずサ、併し一方から又よく觀察して見ると、世の中の森羅萬象、如何なる事柄にも、禍福は相半して居るものサ、」

×「君は、大にエラそうに大人ぶるネ、」

○「徳富さんの「順禮紀行」を御讀みてしたか、」

□「ハア、一寸覗きましたたがネ、」

○「事實を詩的に書いたのだから、何とも云へぬ妙味を感じますネ、詩的ガラリ

ヤの一段なんて、何といふ美しい書き方でしよう、名所舊跡を巡拜した時などには、是非あゝいふ筆が欲しいものですネ、」

□「全く、蘆花の筆は益々圓熟の境に達して來ましたよ、……併し、先生もアツチ、コツチもがいた結果、とう／＼、

限りなき命の水の源は

人の心の奥にぞ在りける、

と唸り出したからネ、……人は何んでも心の持ち様一ツさ、三角君なんぞも、そう思つて、チト、しつかりし給へよ、」

○「さすがの蘆花さんも、始めから其所に御氣が付かなかつた丈、少し遠方御苦勞の感ありですワネ、」

×「そりや、誰だつて、迷はぬ先に悟りはないから仕方がないサ、大なる迷ひには、大なる悟りが従ふ、つまり、煩惱即菩提だから、僕等ももつと／＼、迷つ

て、迷つて、迷ひつくして、然る後に大悟徹底するつもりで、まだ／＼準備中なんだ、あんまり、早く悟り過ぎて、砂原ごろ／＼石や、ヒネ澤庵御茶漬さら／＼といふ様な、無味乾燥な生涯にかたまつては、それこそ最大墮落だからネ、」

□「迷つて／＼迷つて迷ひ死に、死んだら、何所へ行くだらう、」

×「無間地獄か、それとも辟支佛びやくしぶつの御淨土かネ？」

○「イヤ、近頃はなか／＼辟支佛が澤山になつた様ですネ、あのそら、例の憂悶さんネ、あの人なんかも、もう立派な辟支佛ですよ、理窟はチャント分つて居ながら、迷つて居るのですからネ、」

×「先生、近頃また何か憂悶をやつて居るのですか、」

○「ハア、其所邊に手紙が在りましたつけ、」

×「成る程在ります／＼、何んだか細かい字で、ウヂヤ／＼と書いて在るでありませんか、」

○「マア、読んで御覧なさいよ。」

×「……昨夜孤燈の下、寂然哀思に耽りつゝ在る所へ、いよく結婚日限決定の通知に接し、之れにて萬事了す矣といふ次第ですか、あれやこれやの行き違ひの爲、目下殆んど鬱悶に堪へず、こゝに暫時叔母上に向つて噴火口を向くる事を許し給へ、……兼ねていよく伯父から手詰の談判を受けし時、已むなく承知せしが、今から思へば一生の不覺、ア、我が無思慮の爲とは云ひながら、面白からの記憶を生涯離るゝ能はざるは、遺憾の至りです、昨夜は、實に名状すべからざる失望と不快との感を抱きつゝ寢に就きました、明くる日からは、媒介人始め知れる誰彼から祝詞を述べられ、胸底は寂寥と不快とに満ちながら、兎に角表面丈は喜ばしそうな顔をすべく餘儀なくせらるゝとは、何といふ、ブザマな事でしょう、之も全く自業自得！此間中から、沈濁な空気を吸つた肺臓を一旦清めてからてなければ、到底新たなる生涯に入る事は出来ません、叔母上

の純潔な快潤な駄法螺の通風器を借りて、是非一度、胸の掃除をしたく思ひます、どうぞ少しは僕の境遇も察して、二三日御許に遊ばせ下さいませんか、僕も随分今迄は辛抱して見ましたが、もはや辛抱の綱も切れたれば、已むを得ず、白旗を掲げて、こゝに憐憫を乞ふ次第です、我身は幸に健なるも、我心は實に砂漠の如し、嗚呼！、

われは男子泣かじ想はじされど〜

暗に遠なく濱千鳥かな、

言外の餘情とやら、たんと汲んで下さい。」

憂 悶 生

叔母上様

×「あの謹嚴な男が、これ丈の事を云ふのには、よほど弱つたと見えますネ、充分同情して慰藉して、あやりなすつたてしよう。」

○「親類同志の義理合ひて極めた結婚を、他人が外から同情したつて、今更どうするものですか、同情すればする程、なまじひ感情を刺戟する事になるだらうとおもつて、私は放つておきますよ、」

×「随分慘酷ですネ、」

○「真面目な人程、一時おもひつめるとやるせなく思ふものですが、ナーニ其内には鬱悶の火氣が醒めて、家庭に新風味を見出すものですよ、全體此人は、妙に陰鬱な熟字を並べる事が好きな性質なつちなだから、勿論文字通りに解釋するには及ばぬのです、」

□「一體、その結婚成立の筋道は、始めどうして起つたといふのです、」

○「ナニネ、此憂悶さんは、小さい時に両親を失つて、その後全く伯父さん夫婦の手で育つたのです、すると又、伯父さんの方では女の子丈といふ譯から、先達伯父さんが提出した議案を親族會議で議決して、つまり両方の子供を夫婦に

して、二軒を一軒にして、両方の便益を計らうと云ふ事になつたのです、」

□「それぢや、至極結構な事ではありませんか、それとも何か外に意中の佳人でも在るのですか、」

○「結構な事ですともさ、それに絶對的にイヤなら、始めからチャント斷るがよし、長い〜間利害得失を考へた上、自分自身で立派に承知して置きながら、今更愚痴をこぼすとは、全く阿呆の上塗りですよ、斯様な事を煩悶の種として、華嚴へでも飛び込まれては、瀧も甚だ迷惑千萬な次第ですネ、……何？、意中の佳人！、そんな氣の利いた事は多分無いでしょうよ、唯ホンの意氣地なしなんてですよ、」

×「けれど「愛慕者は現在見たる女性に迷ふに非らずして、空想に浮びたる女性に迷ふなり」といふ格言が在るから、憂悶君だつて、空想的では何か相應に考へて居たかも知れないサ、」

○「空想丈なら、今後もどしく、勝手に天地四方に向つて馳せて、詩を作るなり、小説を書くなり、好きな様にすればよいではありませんか、まさか、いくら親類だつて誰だつて、外から空想に迄干渉するものは在りませぬからネ、」

×「けれど、叔母さんは、青年の感情を充分理解せぬから、そんな無情な事を云ふけれど、何とか慰藉してやり様が在りそうなのですネ、」

○「青年の繰言などには、なまじひの同情をするより、しつかり棒喝でも喰はせて方が、却つて功験くわんが在るものですよ、もし、是非同情してやりたかつたら、三角さんの自身で、して上げたらよいでしょう、同じく空想の戀愛に憧憬するお仲間だから、」

×「併し、こんな事は、友人より却つて老人の方が全くはまり役ですからね、憂悶君にした處で、僕等には、いつも兄貴ぶつたしかつめらしい事許りいうて居て、老人には、やはり甘え安いと見えませすからネ、」

○「イヤハヤ、左様な事は、一切御免を蒙ります、」

×「一體、俗世間の連中は、單に財産の安全とか、親族の便益とかを主にして、婚姻そのものを極めるので、人間の感情といふことを無視してかゝるのだからお話にならぬよ、ブラウニング夫人は、始終病身の人で在つたが、「我は唯我愛のみを以て夫に盡すべし」と云うて、自他共に満足して居たとの事だが、人世微妙の價値は如斯所に在るので、到底功利的の人にはこんな事は分らぬさネ、」

□「けれど、戀愛は人世の全部ぢやないからね、然らば、人世の一部に全心を捧ぐるのは、却つて愚の至りではないネ、」

×「戀愛の人世の全部ならざるは、美術が人世の總體でないと同じで在るが、併しながら、美術家に在りては美術が人世の總體であると同時に、宗教家には宗教が人世の全部で無くてはならぬ、もしも、こゝに天才が在つて、美術上の趣味や、宗教上の薰化を以て凡人を風化したなら、立派な事ではないか、然らば、熱烈

なる愛情に一世を捧げたる人が在つて、其人に依つて、一般の世人が人情の温か味と、愛の力とを最も善く理解する事が出来たらどうですか、」

○「よくもまあ、色々と理窟をこねたものですネ、」

×「つまり、人生の全體に解釋を與へるのは、聖人なり、哲人なりで、我々は其一部々々、自分の興趣を感ずるものに向つて全力を注ぎ、各一部づゝの問題を解決して、互に交錯し、調和して、人世の進歩を圓滿完了ならしむればよいので、されば、戀愛に立脚して人世を解決するのは、尙且、他の美術家へ事業家と同じく人生に對して、最も有効なる寄附を行へると云ふべしです、」

□「君の様な戀愛萬能論者は、マア早く自分で實踐躬行して、僕等にその模範を示して呉れれば、心服するが、三十にして未だ家を成す能はず、徒らに空論許りやつて居ても、誰も相手にするものはないよ、」

×「畢竟、戀愛と宗教とは、その極致に於ても等しきものだから、僕も近き將來に於て、一宗の開山になるつもりさ、」

□「マア、其鼻氣息でやつて見給へ、其内には天上のマリヤでも見出す事が出来様から、……もつと外に變つた問題の通信はありませんか、」

○「あんまり、議論が烈しいので、のぼせそうですから、また今度になさいよ、」

□「オヤ、」 (明治四十年)

新歸朝者

一雄「御機嫌よう！」

○「マア一雄さんオ久しぶりネ、よくおたづね下さいました、しかし貴方こそは日本にお出の時から、ハイカラ、コスメにかけては一等賞の組で入らしたから、外國へ行つて、どんなに醇化して御歸朝かとおもつたら、そのマア非文明的な扮装はどう遊ばしたのです、古風な日本服に鼠帯などは、マア田舎者だつて、」

少し通がりは、今時そんな風姿はして居ませんよ。」

一「勿論、之は父の遺物を、其儘用ゐて居るのです、實の所、僕も曾ては随分洒落れても見ましたが、さて、いよ／＼本家本場の巴里あたりへ行つて見ますと、チットや、ソット、洒落たつて、到底追つく氣遣ひはないですから、襟、ビ、ン一本だつて一フランから百フラン、千フランと限りはなし、衣服は勿論、帽でもステッキでも、一寸氣のきいた物が欲しいとおもへば、一ヶ月の手當はつひ、ファイになつて仕舞ひますからナ、それで、僕は外國へ行つてから、大に達磨さんの御弟子になり、廓然大悟とすましこんで、多くは日本から持つて行つたもので間に合せ、已むを得ざる場合でなければ、何も買はんと極めて仕舞ひましたよ、それに、向ふには、男性の中にも、お白粉までつけて、ハイカル、連中があるのですから、此方は一層、黄色人種の特長を見せてやらうといふ抱負で、とう／＼彼地では、不粹者の標本で通つて來ましたよ、これ丈は阿方に賞めて

戴けるかとおもつて歸朝しました。」

○「賞めるもほめないもありませんが、それは又、すつかり豹變なすつたものですね、ホンに可愛い子には旅をさせるとやら、よくもマア、其所まで御安心が届いたのですネ、それにしても、先年貴方が外國へ御出になる時に、御母様が心配して、どうぞ碧眼玉丈は連れてかへらぬ様にと、くれ／＼も云うて居られました、もしも貴族の令嬢にでも戀慕はれたらどうしやうなど、仰言つたが、其方はどうでした。」

一「それがサア、いよ／＼彼地へ行つて見ますと、上流社會の交際など、いふものは、案外嚴肅なもので、ウツカリ、紹介者なしに女連などに口を聞いた所で、振り向いてもくれず、それに、年頃の令嬢にでもなると、始終、母親なり、保姆（家庭教師）なり、傍につき／＼りて、鶉の目鷹の眼で監視して居るのですから、どうして／＼、雑談口一ツきけやしませんワナ、つまり、外國でも自由結

婚などいふ事は、極低い身分の人が、放埒な母親の油断から起る事で、つまり貴族などになると、随分無理結婚も行はれ、到底親の承知しない所などへは行けもせず、やりもせず、とんと日本などい、あまり事情が異つては居らんとすよ、」

○「でも、日本人だつて、外國の人を連れておかへりになる方が、マ、あるではありませんか、」

一「それは、極特種の場合、どうかといふ破目から起る事で、決して通常そんな事は在り得ないです、僕だつて、もしもお金の百萬圓も持つて居たら、どんな事を仕出かしたか分りませんが、今から考へると、全く金のないのが仕合せだつたかも知れないのです、」

○「けれど黄色人種の不粹者ぢやあ金が在つても駄目だつたでしょう、」

一「マアそんなものかも知れないが、つまり親の云ひつけを守る僕の孝心にも與

つて大に力ありサ、」

○「勝手な所丈、親孝行を引合ひにお出しになるのでしようが、しかしお母様がいよく貴方が御出立になる時に、

千萬の海山越えて行く吾子よ

かげになりてもわれはひなまし、

なんて、仰言つた様におもひますから、何んでも始中終、貴方の後で、監督して入らしたのでしようよ、」

一「そうく、阿方……エト何だつけ、

さすがまた行くて遙けき御門出を

をしむ心は人にをくれじ、

なんて、オッウ氣取つた事を、唸つたッけネ、」

○「早いものネ、もう五六年にもなるワ、……けれど、今の世の中は、何んで

もかんでもお金次第、黄金萬能の時代ですから、本統にお金持が跋扈する有様を見ると、つくづく腹立たしい事がいくらか在りまして、私達でも△△△△△になりたくなる位ですよ、」

一「阿方の様なものが、一人二人なつた所で、到底何の事もないサ、畢竟、△△△△などいふものは、云ふべくして、行はるべからざるもので在つて、もしも、金満家が卒先して財産平分でもやるならばだけど、貧乏人がなつた所で、仕方がないサ、」

○「一人づつでも、なる人が増へるので、終に理想の實現が出来るといふのではありませんか、」

一「理想の實現！そんな事が容易く出来る筈のものではありません、」

○「西洋にも△△△△が行はれて居ますか、」

一「盛んに唱へられては居ますが、なか／＼行はれては居ません、近い話が、佛

國にアン、トラン、ジャンといふ有名な新聞が在つて、極端な△△△△を鼓吹して、しきりに賤民を煽動し、時々大問題を持ち上げて居ますが、其社長といふのは、ロシユ、フオールといふ貴族であつて、其人の内へ往つて見ると、總てが保守的で、邸宅の様子から、婢僕のおつかひ方まで、傲然と構へた有様は、丸てお大名式で、之が△△△△者の家だなどいふおもひもよらぬ有様ですよ、」

○「何故でしよう、妙ですネ、」

一「つまり、それが主義は主義として新聞を賣る爲に唱ふる所のもので、自分で行ふための主義ではないからです、其他、矢張佛國にジョーレス（日本の通がりはジョレと發音しますが、佛國ではジョーレスと云うて居ます）などいふ△△△△の首領も在つて、國會議員で、哲學者で、曾ては教授で在つたといふ様な譯で、色々の新聞や雑誌なども刊行して居りますが、さていよく實行の一點になりますと、やはり大同小異ですからナ……僕はまだ歸朝早々てよく

事情は知らんが、日本あたりの△△△者も、やはり大した實行はやつて居らんだらうと思はれるです、」

○「ア、ラ、日本の人達は、そんな言行一致せん様な事はありはしないワ、」

一「阿方が、実際でもして事實を知つて居るのですか、」

○「△△△者なんて、誰れも知己がないから知らんけれど、よく話しに聞いたり、新聞で見たりして居るワ、」

一「新聞や、聞きかじりでは到底當にならんです、僕なども、日本に居る頃は、頻りに歐羅巴の新聞雑誌などを見て、あの人の、この人と、敬慕したものが、いよく彼地に往つて逢つて見ると、何れも聞いた様ではないものです、」

○「デモ、露國のトルストイ翁などは、逢つたら尙更、敬意を表したくなるだらうとおもはれるワ、」

一「トルストイですか、アレは専制政府に對する劇薬みたいなもので、珍らしい

人物では在りますが、劇薬は、常に服用すると却つて人體に害ある如く、國民全體が、アンナ考へになつたからと云うても、國家が圓滿に發達するとは限りません、」

○「ト翁に、お逢ひでしたか、」

一「往かうくとおもう内に戦時になりましたから、とうとう露西亞へは行きませんでした、」

○「お逢ひだつたら、又、敬意を失つたのでしよう、」

一「イヤ、案外増したかも知れませんが、つまり△△△も、宗教心の伴つたものなら危険が少ないが、單に財産平均とか、土地國有とか云うて見た所で、實の曉は怠惰者を増す位が關の山です、」

○「ヒドク、△△△が御氣に入りませんネ、」

一「イヤ、嫌ひな事は在りませんが巧妙くやらんと、所謂有害無効に終るですか

ら、」

○「そんならモウく△△△なんて無風流な話はよして、モウ少し高尚優美なお土産話をして下さいな、」

一「モウ今日は飯時で、母が宿で待つて居るでしようから、明日にも出直して大に美術論でもさかせて上げましょう、」

○「どうぞネ、」

一「承知仕りました、」

○「あばよ、」

一「アハ……、」(明治四十年)

巴里の花束

×「昨日は失敬！、エート今日は美術の御話をする約束でしたな、」

○「貴方の美術論なんて、よほど怪しいでしようが、マア拜聴しましょうか、」

×「ナア！ニネ、僕は巴里留學中、本業の法科大學の科目よりは、大に美術史を研究したのですからな、と單に云うても合點が行きますまいが、同宿に美術家が居つて、常に美術に對する法螺を吹かれるのが残念で、夫れでも内々大に研究して、とう／＼終には先方を吹き飛ばす様になつたものサ、」

○「そんなら、耳はさゝ役だから、マア何うとしましうか、」

×「美術というても範圍は廣いが、何の話がよいです、」

○「早速お小手に一本參つた譯ですネ、私は繪がすきだから、繪の話を伺いたいです、」

×「よろしい、そんなら繪の話ですな、エート、歐羅巴の近世畫を大觀すると、其始めは伊太利と、和蘭との二個所を中心として發達したのです、斯様に簡單に云ひますと、甚だ分り安いが、其當時の伊太利も、亦、和蘭も、現今の國柄

とは大に其趣を異にして居たのですから、従つて、此二地方の繪畫の歴史も、非常に複雑して居るのです。」

○「いくら私がむかし者だつて、伊太利の統一が、前世紀の前半以後に始めて成し遂げられ、和蘭が白耳義と分れたのも、亦、第十九世紀の初の事だ位は承知して居りますよ、」

×「いや、之は失敬！、阿方がそれ程物識りなら、僕も、もう少し念入りに繪畫の話をする張合ひが出ますな、……それで御存の通り、昔の伊太利は、多數の小國に分れて居りましたから、所謂、伊太利派と申しましても、其中には數多の流派が在るのは無論の事ですが、先づ文藝再興時代、即ち「ルネイツァンス」時代の伊太利畫に就いて云へば、「フロレンス」派はミケール、アンジエロに依りて羅馬派はラファエルに依り、「ヴェニス」派はチ、アンに依り、「ロンドンバルヂ」派はヴェンチに依りて各々代表せられて居たと云ふ有様です、」

○「なる程、大變込み入つて居りますね、私達は畫というても、單に見る事ばかりが横好きなので、其所謂専門家ではないのだから、左様やたらに、固有名詞許り並べられても、一向珍聞漢ちんぶんかんですワ、」

×「ホイ、之はまた失禮！、つひ阿方があまり世界の歴史を委しく知つて居られたものだから、急に頼もしくなつて、少しく阿方を買ひかぶり過ぎましたかなア、」

○「これは、御挨拶恐れ入りました、」

×「それでは、今度はもう少し「アブストラクト」に、伊太利畫の發達の順序を述べましような、……抑々、伊太利の油繪も、他の歐洲の油繪と同じ様に、宗教畫から發達したもので、始めは、畫題、その他「エクスプレッション」に至る迄、實に千篇一律、無味乾燥なものでしたが、フラアンジェリコが此在來の單調を破り、自己の創意を加味して、畫中の人物につやを着けたのです、之が

伊太利に於ける繪畫の發達に、大なる刺激を與へたのでありましようが、幾何もなく、ミケール、アンジエロや、ラファエルの如き傑物を出すに至つたのですけれど、併し、ラファエルの出る頃迄は、畫家の社會上の地位といふものは、誠に低いものであつたのですが、ラファエルが出てから、畫家の地位に對し、實に一大「エポック」を作つて、大に世の尊敬を受ける様になつたのです、

○「日本だつて、昔は畫師、俳諧師、祭文語りなんて、同列に數へて、天下を遊行してあるく浮浪者の様にもうて居たてはありませんか、」

×「でも、今日では美術學校の教授などいふと、大分巾がさゝ過ぎるといふ様な話だがね……名作でも、拙作でも、教授のものなどいへば、ドシムといふ價で飛んで行くといふぢやないかハア……、」

○「私は、買つた事がないから知らないワ、それから本題の御話は？」

×「それでラファエルが「ヴァチカン」宮殿建築の際に、壁畫を書いたのですが、

之が非常な大作で、名作で、傑作で、實に繪畫史に一大影響を與へた様な譯てす、」

○「大變な効能書きですが、どんなのでしよう、」

×「到底、口舌の力では分らせる事は出来んです、ラファエルの作斗りではない、ヅキンチでも、チ、アンでも、同じですが、眼で見たにした所で、一枚や二枚偶に見たのでは、よいか、わるいか、微細な事が容易に分るものではありません、つまり、彼の地の博物館なり、宮殿なりへ行つて、數百點比較して見るので、ナル程ハハア……と合點が行くといふものです、」

○「それぢや、私達は到底分らずに御しまひだワ、私も、外國の名畫の繪はがきなどを澤山集めて、チックリ通がつて居るのですがね、」

×「繪はがきや、寫眞版位で、繪畫の眞隨が分る位なら、日本にもモット〜、澤山の名人が出来ねばならぬ譯です、」

○「そんなら、貴方がいまだに大臣に御成りだつたら、美術家保護條令でも出して海外留學生をたんと御出しになつたらよいでしょう、」

×「今だつて、その手腕が在つて、眞面目にやる勇氣のものが在れば、三人や五人獎勵せんでもないが、どうも、兎角美術家などといふものは、「ロマンチック」の性情のものが多いので、のらり、くらり、眞面目にやるものが少ないからね、保護をしても劍呑でナ、」

○「劍呑がつて獎勵せんで居れば、いつ迄も大家の出來ツコはないワ、」

×「それに、まだく日本の油畫などと來ては、なか／＼幼稚なものだから、其内モウ少し發育すると、ドシ／＼留學生を出す時代も來るでしょうよ、」

○「大に、見くびつて入らつしやるのネ、今日では、日本にも、俳優學校の設立さへ見るに至つたてはありませんか、大に藝術家保護案を出すべしだワ、」

×「之はまた大氣焰を吐くものですね、もしも阿方が久米八の弟子になつて、舞

臺へ登る勇氣があるなら、僕も一ツ美術學校の生徒になつて、再び海外へ留學を仕直して、大に卒先して世を指導しますがナ、」

○「オホ、、、出來ん相談はよしとして、元へ戻つて繪畫史の方はどうなるのです、」

×「それから、西班牙のフィリップ四世といふ王様は、政治家としては極めて凡庸の君主で、佛蘭西の爲にさん／＼の目に遭はされましたが、さりながら、西班牙美術の進歩に貢献した事はなか／＼少くない、同國油繪の大家として、今尙ほ尊敬せらるゝヴェラスケーなどは、たしかに此王様の保護に依つて其技術を大成したと申して誤りなかるべく、其他ムリローなども「アカデミー」の建設者として無論西班牙の繪畫史に忘る可からざる人物です、」

○「人間は、パンのみでは生きる能はずといふのは西洋の格言だといひますが、しかし、人間は、パンが無くても生きる事が出來ないから、美術家でも、宗教家で

も、つまり外護の士の有無に依つて、大に成功と不成功とが、あるとは私の持論ですワ、だから、貴方も、美術史の講釋許りてなく、實際に當つて外護をお加へなさいな、」

×「宜しい、そんなら、私が死んだら、私の財産は、フランスでも、マイナスでも、何程あつても、阿方の自由に任せますから、美術家保護用に御使用なさい、」

○「マア、私が死んで、私の財産のマイナスを貴方にも上げるかも知れないが、貴方よりも、私が生き残つて、貴方のフランスの財産を貰ふといふ程私は慾ばつては居ないワ、」

×「ホイ話がまた横道へそれた、總じて、和蘭の畫は「フラマン」と(今の白耳義)和蘭本部とに分れますが、「フラマン」派の方で、最初に油繪を畫いたのはヴァン、アイクといふ人で、夫より後れて、第十七世紀の初年に當つては、リューベンスやヴァン、ダイク等の名畫伯が輩出しまして、各得意の腕を揮ひまし

たが、また、その、所謂、和蘭派の本部を代表して、近世に至る迄光彩を放つて居るのは、ランブランですが、ランブラン以後今に至る迄、之に次ぐ人はなにとの事です、其他、フランツ、ハルスや、クロード、ローランや、ホッブマなどいふ連中も居りましたが、勿論リューベンスやランブランに比しては、第二流以下なんで、とても比べものにはなりません、」

○「なんだか、話が益々複雑して來て、能く解りませんが、和蘭派に二流あると云ふ事を、もう少し委しく伺はれませんかネ、」

×「オヤ、これは驚いた、先刻、阿方が、白耳義獨立の歴史などを大分委しく知つて居られた様だから、和蘭に於けるフランドルの關係位は、とつづくに御承知の事とおもつて居たのです、」

○「ひどく油を採りますネ、」

×「幼少の頃、阿方に「リーダー」を教へられつゝ、油を採られた時の意趣返し

や、」

○「でも、今ではドクトゥール、エス、レットルの大博士様として、個様に御説を謹聴して上げるては、ありませんか、」

×「何んの、かのと、人をおだてるのか、冷かすのか分らん事を云ふお婆さんだ、……それでフランドルとは、エスコール河の左岸アルトアの平原より北海に至る迄の一帶の地方の總稱で、フランドルの領伯は、中世には中々大なる勢力を有したものです、後に此地方は分れ分れになつて、一部は佛國に、一部は和蘭に併合されたのです、而して此フランドルを、形容詞にモデファイ(語尾の變化)したのが、即ちフラマン！、御了解になりましたか、それで、昔、和蘭領て在つたフランドル地方は、現在は、全部、白耳義領に屬し、「フラマン」語は、佛蘭語と共に、白耳義の國語です、」

○「モウ澤山、「フラマン」てさんく吹かれた代り、今度は一ツ貴方を驚かせ

ましようか、」

×「サアくどうぞ、御遠慮なく、」

○「先刻から、賞讃なざるリュールベンスと云ふ人は、唯の畫家ではなくて、有名な外交家であつたてはありませんか、それを御自身また外交家たる貴方が、一言も其事に説き及ぼされぬのは、あんまり、迂濶ではありませんか、」

×「それは、此間、僕が阿方に巴里の名所の説明をして聞かせて上げる時に、佛國の今の上院は、昔、リュールベンスが住んで居つた所で、此人は其當時、和蘭公使として巴里に滞在して居つたので、畫家としても、有名な人ですとか、何んとか、やはり種は僕が、あつして上げた事ではありませんか、」

○「オヤくすつかり覚えて御出ですネ、そして、寫真で見ると、上院の建物は非常に大きい様ですが、あの廣大な建物を、リュールベンスが獨占して居たのですか、」

×「イ、エ、左様ではないのです、一體、今の上院は非常に大きな建物で、巴里名物の一になつて居る位ですもの、いくら、リュールベンスがえらいからつて、あの建物を獨占するなんて云ふ事は、夢にも出来た話ではないのです、彼建物は、リュクサンブール、ヒネートといふ侯爵の持物で在つたのを、ヘンリー四世の未亡人、マリイ、ド、メヂシスが買つて、之を自分の御殿としたのです、それですから、此家と、其後の公園とを、今以てリュクサンブールと稱へて居ります、而してリュールベンスは、非常に此ヘンリー未亡人の愛顧を受けて、其御殿の内に住居して居つて、各種の大作を書いたのです、巴里のルーブル博物館には、其當時リュールベンスが書いた、ヘンリー四世の一代の繪傳ばかりを、特に廣大なる一室に集めてあります、」

○「へい、すると、リュールベンスといふ人は妙にえらい人だつたのですネ、ヨーク世人が、多藝無能なんて云ひますが、其人などは、實に、多藝有能と云はねばなりませんかね、」

×「此方の様に、無藝無能では、地口にも成りませんかね、」

○「それから、ヨルク佛蘭西の「アカデミー」だの、「サロン」だのといふ事を耳にしますが、佛國の方はどんな工合に發達して居るです、」

×「佛國は、十六七世紀頃になつて、頓に勃興しましたが、到底和蘭などには及ばないです、佛國も無論大に伊、西、和等の影響を受けましたが、十八世紀の終り頃までは、大に發達したとは申されません、是より先き、ワットウが生まれ、始めて宗教畫から近世畫風に轉じましたが近時佛國派油繪の爲に、一新紀元を開いて、實に佛國の畫を世界的ならしめたのは有名なダヴキッドです、此人もまた、大畫伯たるのみならず、亦一世の政治家で在つたので、佛國革命黨に屬し、其當時の議會の議員で、ルイ十六を死刑に處すべしと投票した一人です、又、山嶽黨に加入して、極端なる革命論を唱へ、一時は議會の議長にも選

ばれた事がありました。ナポレオンは、實に彼に佛國第一畫家の稱號を與へました。此人の傑作は、巴里の博物館に御出になれば、飽きる程ありますが、先申し上ぐる通り、極端な革命黨の一人でしたから、惜しい事には、ルイ十八世の即位と共に、國外に追放され、ブルクセルで死にました。此人に依つて始められた畫風を、「クラシック」といふのです、

○「クラシック」つてどんな畫なんです、

×「日本の人達は、暗黒いのを「クラシック」と呼び、鮮麗なのを、近世畫と唱へるそうですが、併し繪具の濃淡で、「クラシック」を判断するのは誤りて有つて、つまり、「クラシック」とは、畫の構成と曲線の配合に就いて、一定の規則を設け、其畫題中の人物も、主として古代彫刻などより型を採るといふ、あんばいですから、其畫は畫家其人の理想や精神を表はすのではなくして、一種の典型美學に陥るの弊があるのです、それですから、此「クラシック」派は、忽ち

「ロマンチズム」の爲に壓倒され終りました、

○「ロマンチック」派とは？、

×「ロマンチック」派とは、何等の規則に拘泥せず、理想通りに繪畫を構成するので、此頃の油畫の大部分は、此派に屬して居ります、

○「けれど、油畫には、いやに暗黒いものと、鮮やかなものと、二種類あるぢやありませんか、」

×「それは、土地の天然に支配されて自然に出來上つたので、伊太利あたりの風光は、實にいつでも鮮かて、長閑な和煦蕩の風光ですから、自然鮮明な畫が出來上り、和蘭邊は、いつも濕つぽい空氣で、何だか空模様は薄暗い様ですから、自づと暗黒な畫が出來たのでしようよ、日本の油繪などでも、日本へ來た事のない外國人に見せると、どうも色の配合が眞實しやかでないといひます、一度日本の土地を踏んだものは、必ず頷くです、どうしても天然の風光の

作物を支配するのは、已むを得ん譯ですから、

○「油繪では、やれ着色が肝腎だの、輪廓が大切だのと云ひますが、つまりどちらが肝腎なのでしょう、」

×「僕等は、何れも大切だともひますが、何がさて、この着色説と輪廓説とは、チャンと二派に分れ、なか／＼鏝をけづつて争つて居ますが、先づアングルなどは、輪廓説の大家で、ドラクロアなどは、着色説の主張者ですが、このドラクロアは、晩年に至つて名聲が大に上りましたが、とう／＼「アカデミー」の要求をば謝絶して應じなかつたです、よほど氣骨のある人らしかつたです、夫れから、モウ一つ、近來は「インプレッショナルニズム」と云ふのが、中々盛になつて來た様です、」

○「一體どんなのです、」

×「どんな、こんなつて、矢張り言蒼ては説明は六ヶしいですか、名の表はす通

り、畫家の知覺に基き、物體を在りの儘に畫くと云ふのが此派の主義です、何でも、此派の元祖と稱せらるゝ、マネーやモネー等は、其畫風を組織する爲に大日本畫を研究したといふ事です、此派で近來有名な人は、ミスレー、ギョーマン、ピッサロー等ですが、此初の二人の畫は、巴里の日本公使館にもあつて、僕は彼地へ行きたてには、どうもこの畫が珍奇に感ぜられてならんかつたです、それが四五年も經つて、慣れて來ると、成る程と趣味を見出したです、」

○「それは、貴方の繪畫眼が發達したからでしょうが、それにしても、一枚お土産に買つて來て下さればよいのに、」

×「馬鹿をいうては困ります、お土産になる様な名畫なら、到底僕などの財囊では應ずる事が出來んのです、」

○「へー、そんなに高いのですか、」

×「公使館のは、小さい安物というても、それでも三四千圓は出て居ましょう、

よいのになれば、一萬圓も出さねば手に入りません、それも、お金許りでも駄目です、それ／＼手續がないと容易には、手に入りません、」

○「それはまた滅想な話ではありませんか、是非其「インプレッションニズム」の名畫を複寫した繪はがきでも、畫帖でも見たいものですネ、」

×「繪はがき位なら、取寄せて上げてもよいですが、到底妙味は分りませんぞ!!、」

○「分らなくつても、是非欲しいものですネ、外にもナット澤山に繪はがきを、序ながら取り寄せて下さいナ、貴方の出鱈目の繪畫史を謹聽したお賃にさ、」

×「サン／＼に喋らせて、揚句の果てに聽賃とは、押しが強さ加減恐れ入るナ、」

○「貴方が、ア、ア、ア、の、ウロ覚えの、繪畫史を、眞面目くさつて御話になる押の強さと、大體似たものでしようよ、」

×「そんな言を仰言るが、日本の堂々たる美術家中にだつて、僕が今話した丈の事を知つて居る人は、幾人もないとおもはれます、」

○「本職の人達は、大體心得て居るべき筈だわ、私だつて、一度彼地へ行つて來れば、其位の事は云へるワ、」

×「それが、なか／＼そうは行かんです、つまり佛文なり、伊太利文なりが、充分讀めなければ、たゞ眼で見た丈で、史傳や、批評文などを、自由にあさる事が出来んければ駄目ですからネ、會話さへもろ／＼出来ず、勿論、美術論などはお先き眞暗で、それでたつた四五年も居たぎりて、洋畫の大家で御座いは、それこそ恐れ入り奉らざるを得ないです、だから、此後は留學生を派遣するにしても、大に語學の獎勵をして、その素養ある人士を撰ばんければ駄目です、」

○「けれど、畫などは、生涯を期して進む可きもので、かへりたてのホヤ／＼を攻撃するのは可愛想だワ、長い眼で見て居なければネ、」

×「ナアニ、小皮功に安じて、お天狗になる連中が多いから云ふのサ、」

○「大變な攻撃ネ、敵に美術家でも持つて入らつしやると見えますネ、」

×「ナアーニ、却つて親友に美術家があるから、其邊の消息も知つて居る様な譯だ。」

○「へー、そして貴方は彼地では、随分度々共進會や、博物館へ入らしたてしやうネ。」

×「随分通つたものですよ、巴里には澤山博物館がありますが、「ルーブル」と「リュクサンブール」との二つに行くのが一番爲になります。「ルーブル」の方は、主に古きものを集め、「リュクサンブール」の方は近代のもの、即ちサロンの一二等中の有名なものを収めて、館が大きくないですから、だん／＼置き場がない様になると、順次に稍古いものから、地方の博物館へ送り、可成新しいもの／＼を集める様にして居ます。」

○「近來、日本では佛國のアー、ヌーヴォー式だなんて云ひますが、どんなのです。」

×「困るな、そんなにくだらぬ事を聞かれては、ソ、ラ、佛語のアー、ルは、英語のアー、トで、技術と譯しましょう、ヌーヴォーは、ニュー、で、新らしいと云ふ意だから、つまり、新式とか、流行美術とか云ふに過ぎんです、日本だつて、當世流行何々なんて云ふ言葉が在るぢやありませんか、マアそんなものサ。」

○「私は、もつと、深い意味でも在るかと思つて伺つたのだワ。」

×「それで、此新流行の美術と云ふのは、自ら一種の型を成して居て、總ての物體を曲線でくづしして、之を模様はけものに爲たのです、此頃日本の畫葉書や、雑誌の口繪などに、怪物はけものみた様な女だの、何だか正體の分らぬ草花等が書いて在る、あれが、「アー、ヌーヴォー」の眞似ですが、實に其まづさ加減は、見られたものでは在りません、何んでも、此型は、光琳の畫から出たとか云ひますが、眞實ほんたうかどうか知りません、巴里の料理屋などでは、部屋全體を、此様式で裝飾したのがあつて、中々粹いさなものです、併し、油繪として、此流派の繪が畫か

れたのを、僕は、まだ見た事は在りません。」

○「けれど、京都あたりの神社佛閣に參詣して、光琳の作などを見ると、何ともいへぬ優美で上品なものがあるでは在りませんか、本願寺でもかさつばたの金屏風を見たことがありますか、なか／＼上品なものですネ、」

×「僕が、京都をよく知らぬと思つて、少しく吹きますネ、」

○「吹くなんて、そんな譯ではありませんが、いつぞや、嵯峨の大覺寺へ行つた時、障子の腰板に、光琳の兎に木賊をあしらつた畫を見ましたが、今でもヨクあれが記憶に残つて居ますよ、私が、もう二十歳も若いと、早速あれを着物の裾模様か、長襦袢にでもうつさせるのですがネ、」

×「阿方の様な、太てぶつとうな不細工の婦人の裝飾用に使はれたら、光琳は定めし地下で泣くだらうナ、」

○「後世に眞の知己を得たツて嬉し泣きにですか、」

×「ウフ、、、日本も、近頃大に財源に困つて居る様だが、まだ口に税金をかけた話は聞かぬから、何とでも、仰言るがよいサ、」

○「若し税金がかかる様になれば、大に慎みますサ、」

×「そう覺悟してお出なら、先づ間違ひはあるまいサ、……閑話休題として、再び話を繪の方に戻すと、日本は、いくら威張つても、まだ／＼駄目な所が取れんです、」

○「何故です、」

×「何故ツて、ソラ、日本では、畫の先生とさへいへば、直に水彩畫でも、木炭畫でも、油繪でも、何んでも、出來ると心得、おまけに、肖像畫、風景畫、歴史畫、何んでも持ち込んで行きますが、彼地では、なか／＼それ／＼専門にやつて居つて、容易に、その人の得意でない方面の事は、依頼もしませんし、頼んでも應ぜんのですからナ、つまり、頼んだり、見たりする方の普通人が發

達せんければ、畫家それ自身も、發展が六ヶしいです。」

○「それもそうですネ、」

×「つまり、醫者などでも、東京あたりでは、それ／＼内科、外科、眼科、耳鼻咽喉科、其他何々と、専門にやつて各々大名家を成して居ますが、田舎に行く、と、すべてを心得て居らなければ、患者が承知せんやうに、日本の畫家も、マ、今の状態では、田舎むきに出來上つて居て、まだ／＼都向きには達せぬ有様なんです、」

○「それは、畫家それ自身の罪ではなくつて、時代の所爲ですもの、畫家を攻撃するのは、間違つて居はしませんか、」

×「併しです、やはり熱心な名家が輩出すれば、「エポック」が出來ます、」

○「何の事だつて、「エポック、メーカー」なんて、そんなに度々澤山出たら、やはり、「メーカー」の價値が無い譯だワ、」

×「僕は、必ず近き將來に於て出るとおもひます、否、出る様に希望します、」

○「希望なら、御同然だワ、もし出たら、差しつめ私の肖像を書いてもらつて下さいな、」

×「貴方の風姿では、到底畫題にはなりません、」

○「ア、それでも寫實派の人に頼めば、悪いは悪いなりて書いて下さるでしょう、」

×「左様、そんなら、ボンチ畫の名家にでも、一ツ頼むとしましょう、」

○「鳥羽僧正の様な方なら、私は喜んで瞑目するワ、」

×「ヨク、ツベコベと喋る人だネ、」

○「だつて、貴方があまり、畫家をおけなしになるから、腹が立つからサ、」

×「畫家に、親類でもあるのですか、」

○「そんな氣のきいた事はないけれど、私は畫が好きだからサ、」

×「好きなら、長所短所をよく研究して、批評せんければいかんです、批評に依つて、畫家は大に發展しますから、」

○「けれど、保護の肥料も施さなくて、批評の日光に許りあてれば、草木は枯れてしまふワ、よく培養せんければ、よく收穫はなからうとちもはれるワ、」

×「そんなら、批評に先立つて、先づ美術家保護案でも提出しましょうかな、肥料のさゝ過ぎも賞めた話ではないけれど、」

○「どうかね、そうなるとよいですネ、」

×「近き將來に於て、僕が當局大臣にでもなる時を待つて御出なさい、アテにせずには、」

○「ハア、どうぞネ、大にあてにして待ちますワ、」

×「大變、話が理に落ちたが、チット海岸へでも散歩に出かけませんか、」

○「私も、お母上^{かあさん}へ御機嫌伺ひかたく、お宿迄参りましょうよ、」

×「お婆さんと一所は、あまり景氣もよくないがナ、」

○「サア、参りましょう、」

×「ドッコイサ、」

○「ア、耳がくたびれた!!、」(明治四十年)

展覧會を聞く

を、ど、り

金 森 觀 陽 氏

×「あまり賞むべき作ではありません、」

○「どうも、これ丈の人物を集めて書くには、よほど骨が折れたでしょうが、時代のふるいものを参考にして、色の褪せたまゝを寫したのでしょうか、或はわざと、斯ういふ淡彩を用ゐたのでしょうか、」

×「いづれにしても僕等は感心しませんナ、とても賞に入るべきものではありません、」

せん、

護、花、鈴

今村紫紅氏

×「色の全體が暖かい黄味を含んでゐて、全體のトーンや布置も悪くないとおもひます、線も善い様です、」

夏の加茂川

松宮芳年氏

×「これは、兎も角新しい研究の跡が見えて居ります、繪の面積は小さいですが、小さい丈に、まとまつて居てよい方です、」

○「私は、京都に永く居りましたから、實景に就いて割合に感興が多いですよ、」
×「一體面積の大きいといふ事は、藝術品としても何等の價値をも加へるものではないと思ひます、今の日本畫家は、その點の智識に缺けて居るだらうと思ひます、だから、もつと小さく描いたら、引き緊つて面白いだらうと思ふ繪が澤山あります、大きなものを描いて、素人ををどかさうの、展覧會で當てようのなど

いふ量見は藝術家として最も忌むべく、至極よくない考へです、

○「そうですかネ、」

朝顔と驛路の女

鏑木清方氏

×「もつとよく描いたら情味が現れたてしようが、これでは人物の心持がよく現れて居りません、」

○「それでも直ぐに悲しい場合といふ丈はおもはれますネ、」

×「まあそこまで買つて御やんなさい、アハ……」

噴火坑

川北霞峰氏

×「たまたね作です、」

○「寫實てしようか、」

×「寫實にしても、もちつと何んとかありたいものです、これなどが、無意味にたゞ大きなものを描いた例てしよう、」

○「なる程、」

あかつち山

平井 煤 仙氏

×「これは新らしい試みて稍成功したものです、」

○「構圖は、いつかの菱田春草さんの落葉に一寸似てゐますネ、」

×「勿論、あれに似て、或る點までは新らしい手法でやつてありますが、落葉の後に似た丈ズツト匂ひが薄い様です、」

韓 信

尾竹 越 堂氏

×「おもひ切つて大勢の人物を集めてありますが、善い作ではありません、」

○「犬は今の西洋犬に似て居りますネ、」

×「犬丈が、現代の寫生なんだからでしょう、」

一休 禪師

橋本 正 素氏

×「この人は、故雅邦先生の門人ですが、まだ〳〵先生の境に達せらるゝには、

間がありましよう、顔面の線なども、堅きに過ぐる様です、」

○「けれど、一休禪師つて方は、定めしこんなとぼけた顔をして居られたのでし
ようネ、」

×「かういふ大徳を描くには、やはり自分も達禪の士でなければナア……そこへ行くと、古昔の人は繪を描いたのではない、いづれも信仰を表示したのですから、繪の巧拙を別にしても心持がよく出て居ます、」

○「風景よりも、人物の方が素人にもあらが直ぐに分る様ですネ、」

×「そうとも限りません、風景でも、遠近、高低、淺深などは、直に誰にでも分りますから、」

髮

池田 蕉 園氏

○「あら……、榊原蕉園女史は嫁せられたのですか?、」

×「そうです、池田輝方というて、やはり日本畫家の所へゆかれたのです、輝方

君は、日本新聞の挿畫なども描いて居る人です、池田君のは落選したけれども、女史のはかくの通り入選したのです、」

○「かういふ繪の心持は、とても女でなければ描けませんナ、」

×「しかし、蕉園女史としては普通のもので、大變上出來の部といふでもありません、」

竹、取、

前田青邨氏

○「何んだか火事場見た様な騒ぎですネ、」

×「これは、今竹取姫が上天するといふ際で、地上の人々が大騒ぎな所です、まあ、これ丈おもひ切つて描いたのは感心です、……これなどは、即ち面積が小さいからよく引きしまつて見えるのです、」

埋、經、圖、

長野草風氏

○「何んだか、道長公の顔が大政治家らしく無いぢやありませんか、」

×「平安朝の貴公子は、大方みんな斯んな顔をしてゐたのでしよう……アハ、ハ、」

日、光、山、四、季、

山内多門氏

×「よい出來には相違ありませんが、こんな横長い物を何所へ用ゐるのか分りません、」

○「あらかじめ裝飾用に注文が有つて、御描きになつたのではありますまいか、或は又横巻物ではありますまいか、」

×「或はそんな事でしよう、」

○「でも描きこなしてありますわネ、」

夾、竹、桃、

廣江霞舟氏

○「素人が見ると、心持のよくない色彩ですネ、」

×「よく見るとそうでもありません、稍新らしい面白い所もあります、」

水、墨、山、水

山岡米華氏

×「一頭地を抜いた善い作です、」

○「だから、御買上になつたのでしよう、」

×「御買上は、繪の巧拙より、別に又他の事情が伏在して居るので、必ずしも標準にならない事もあるのです、」

雨

竹内栖鳳氏

×「審査員の竹内先生としては、むしろ悪作の方です、」

羅、浮

谷口香嶠氏

○「妙な女ですネ、」

×「梅の精靈なんて、大方こんなものなのでしよう、」

○「ちやマア、」

辟邪迎福

佐久間鐵園氏

×「僕は斯ういふ繪に少しも同情が持てませんが、かういふ形式かも知れませんが、十軒店の五月幟にあり相なものです、」

○「随分御氣の毒ないひ草ネ、」

雨、後、山、水

川端玉章氏

×「これはあまり成功の方でもありませんが、この先生としては、古いテクニクに捕へられず、何か新しい事をやつて見様といふ企が感心です、しかし僕等には、むしろ譯の分らぬものです、」

○「では、この先生の圓熟した技巧だから、この位に見えるのでしようか、」

×「つまり、月並な宗匠が、一寸新派の俳句を真似たといふ所ですナ、外の人がこんな事をやつたら見られますまい、」

○「貴方にか、つちや、どれもこれもメチャクネ、」

×「ナア、ニ、それでもありません、本當によいのはやはりよく見えますよ、僕

等のは、あら探し罵倒するのではなく、深い同情を以て鑑賞してゐるのですから、なまじひ賞めると、ひいきのひき倒しになりますからナア、」

若葉の山

木島櫻谷氏

×「色にチャームする所がありません、鹿の色と、茶ッポイ草の色との對照が寧ろ僕には不愈快に感じます、」

○「斯う審査員の諸大家とならべてあるから見劣りするぢやありませんまいか、」

×「けれど鹿の寫生とか物のかき表はし方が忠實に努力してありますから、賞に入るかも知れませんが、妙な事には審査には藝術品に努力を加へてありますから、同じ程度の出來ても、工手間のかゝつたものがよく通りますからナア、」

人眞似

尾竹國觀氏

○「狝猴にして冠するといふ寓意でしようか、」

×「つまり猿の性質を現はす爲の題材でしようが、悪い出來でもありません、」

山路

横山大觀氏

×「この先生は好んで西洋風の眞似をせらるゝ傾が在るのです、ですから、將來がまだく望み有る方の疑問です、木の描き方は、確に油繪から出て居ります、そして點景に入つて居る人物が、わざとブリミチイブに見てゐるのと、馬の腹から足がぶら下つてゐる様な所なども、却つて呑氣で面白い様です、」

○「點景の人物は衣服の色が青いのが、めだつて嫌ですネ、」

×「それでもありません、此色で全體のトーンをしめくゝつて居ます、」

水

尾竹竹坡氏

×「布置は一寸面白い様ですが、水のあやが、丸でインキを流した様で、更紗模様の墨ながしの様で、僕等には大に氣障です、」

○「けれど、わざと模様の様に工夫せられたのではありますまいか、」

×「そうです、上方友禪の圖案には最も妙でしようよ、なんでも「古扇面」から

出たとかいふ事です、若し、いくらよく出来て居ても、一度人の啓いた路を歩むのは、樂な事で、割合に頭のない人にも出来る事です、」

墨 牡 丹

益 頭 峻 南氏

○「この先生は、なまじひに新しい事をやらうとあせられぬから、無難に出来て却つて心持がよい様ですネ、」

×「そうです、呑氣に古い所をそのまま描いてありますから面白いです……、僕等の頭とは少しも交渉が有りませんから、僕等の眼には現代でない、別な世界の人間がしてゐる仕事の様にもへて、斯ういふ繪を見る時は、少しも主觀が混らずに、純客觀的態度で、鑑賞といふよりも、むしろ無心に見て居る事が出来ま

日 照 雨

北 野 恒 富氏

×「こんなのは見様に依つて、よいとも悪いともいへる作です、マア割合に人好

みのする方でしよう、」

嘲

結 城 素 明氏

×「ちつさのある善い畫です、我輩は、この第八室では、この畫丈が見る價値のあるものとおもつて居ます、線の取扱ひ方が、此人の何時もの繪の様に、デコラティブに取扱はれて居ます、そうして、かう云ふ繪としては、成功に近い完成したものと思ひます、構圖もあもしろいし、寫形も確かです、それに色のアレンジメントもなかくよいです、」

○「今度はめづらしく御賞め言葉が出ますネ、」

×「そうです、日本畫の行くべき道としては、僕はかういふ行き方は、日本畫の性質や、材料の束縛、そんなものをよく理解した惻口なやり方だらうと思ひます、日本畫が、これから先き亡びずに生きて居られる道は、斯ういふ行き方と、それから故春草氏などの開拓したやうな、裝飾的分子を多く含んだ繪などとし

よう、つまり舊套を脱して、未だ人の啓かぬ、新らしい路を見出して進んで行く事は、非常に困難で頭腦あたまも要し、努力も必要です、併し、この繪は大部分の審査員の頭とは大にかけ離れて居ますから場内の日本畫では、最もよい方ですが、或は賞にもるゝかも知れません、

○「支那人を寫生したのでしょうか、」

×「多分寫生ではありません、また、その必要もないのですが、よく支那人になつて居ます、もし日本人なら、讀賣新聞の關如來君に似てゐる相です、」

支那風景

寺崎廣業氏

×「こんな繪を金屏風に描くなんて惜しい事です、全く無暗に筆技を弄したといふべきもので、嫌味を感じる丈ですから、長く見て居られません、おれの繪はうまいだらうといふ趣のある、つまり技巧の押し賣です、」

○「審判官でしよう、」

×「てなければ、出る様な繪ではありません、何しろ僕はこんな態度が嫌ひです、」

○「おやくおさんくネ、」

忍耐

尾竹國觀氏

○「勝家と秀吉ですネ、」

×「古い題材を探し當てたのでしよう、」

よぶ方へ

廣瀬東畝氏

×「たゞ大きく描いたといふ丈、イヤナ作です、」

赤茄子と芋

平福百穂氏

×「稍新らしい試みです、」

○「題材がですか、」

×「凡てこの心持がです、併し少しく少女の寫形が不確だし、背景がごちやく

して居ますが、俳味が、つた新らしい味が受取れます、こんな繪も一枚在つた方が面白いです、」

○「たゞ、ヴァライチイとしてゐるか、」

×「そうですね、種類の變つたといふ點に於てゐず、けれど、審査員がかういふ新しいおもむきの變つたものをよく通しましたよ、」

我、庭、の、秋、

平田 松 堂氏

×「この人は、もと内務大臣で有つた平田男爵の令息で、美術學校の卒業生です、」

○「華族様でもなければ、こんな大きい八ッ手は御庭にないでしょう、」

×「貴族には、衣食住の心配が無いのですから、充分努力を怠らなければ成功せらるゝでしょう、」

○「それにしても、今年は妙に屏風が多い様ですネ、」

×「屏風は運搬に便利で、しかも、大作が掲げらるるからでしょう、」

新、承、恩、澤、

須佐 天 齋氏

○「まん中のが楊貴妃でしょうか、」

×「そうですね、これでは全く楊貴妃も、侍女も別段變りのない同じ型の美人ばかりです、」

○「いつかの横山さんの「流燈」の美人と同じタイプ顔ですネ、同じモデルを使つたのでしょうか、」

×「これは多分モデルを使はないのでしよう、だから、どれも、これも、同じ美人なんです、」

○「意中の佳人が在つたのかも知れませんが、」

×「そりやあほさに……アハ、ハ、ハ、」

春、日、野、

高橋 秋 華氏

○「鹿の色は似てますけれど、巫女の袴の色は赤味が缺けて居るではありません

か、」

×「この人の見た時は、こんな色のをはいて居たのでしよう、そうでなくとも、この人には斯う見えただのでしようよ、」

○「私、奈良へ行つた時、もつとく赤い緋の袴をはいた乙女達が、春日野でわらびを採つてゐて、傍らの杉の大木からは藤の花が咲きこぼれて居る、あの時位詩的に感じた事はありませんよ、私はどうしても、巫女の袴の色は、こんな茶が、つた色ではつり合ひが悪いとおもひますワ、」

杉 垣

岡 文 濤氏

○「妙に古い濃い色ですネ、」

×「芝居の小道具の様な氣がするのは、構圖の爲めばかりでなく、色が濃くて小道具色だからです、併し悪い方ぢやないでしよう、」

○「これで日本畫は、おしまひですネ、彫刻と西洋畫とは、少し休んでからにしま

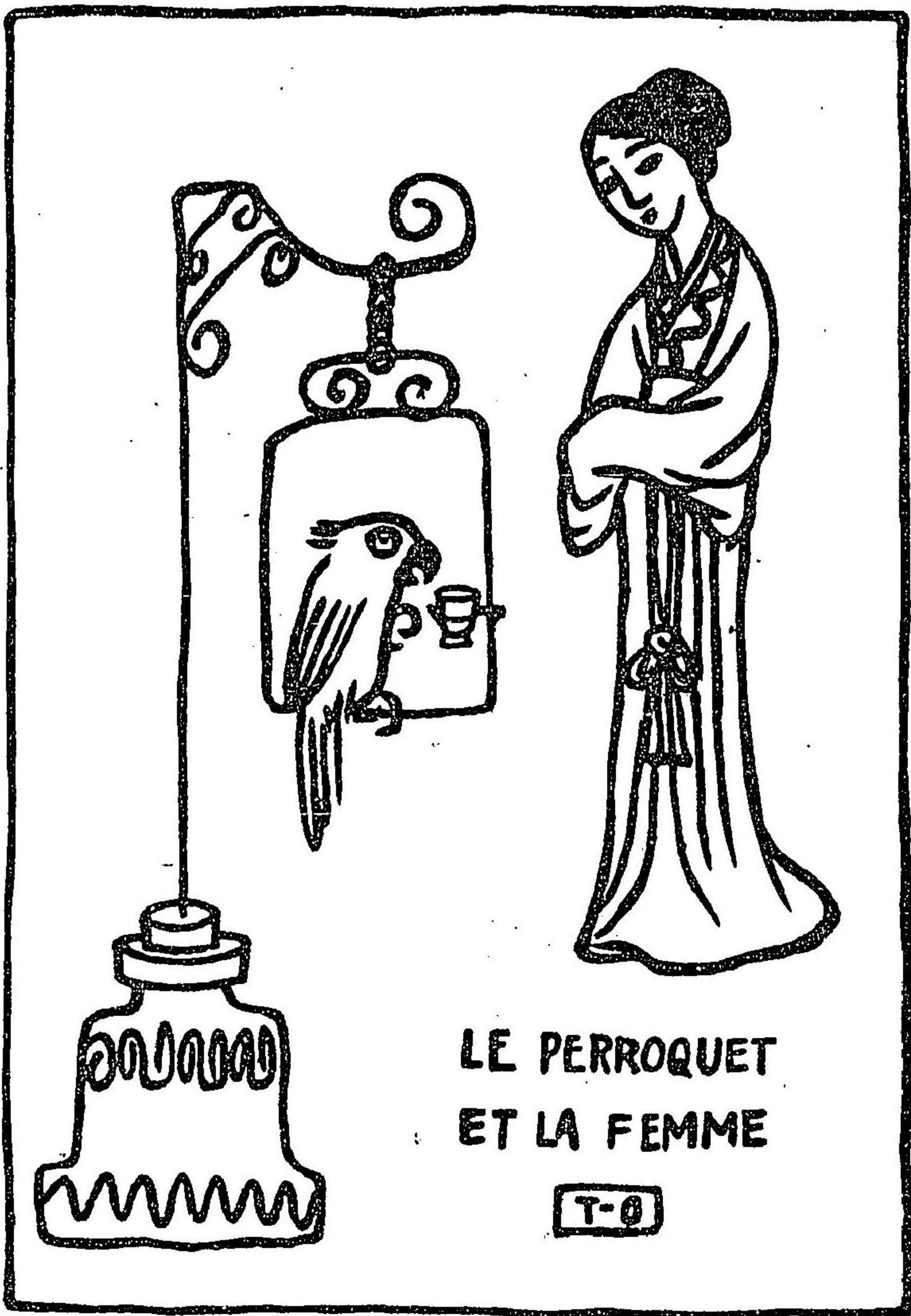
しよう、」

×「僕もあんまり喋つたから、喉が乾きました、カッフエーでも飲んでからにしましよう、」

これより休憩しつゝ、今一般に世間では、日本畫が危機にありと申し、また日本畫家自身にも何等の自覺を持たざる人が多くして、大部分は、新らしいものをくくとあせりて、却つて五里霧中に彷徨し、随つて、自己の藝術的立脚地にふみ迷ひつゝある事は、それ等の人々の作品がよくそれを表現して居るが、要するに、そは作者の技巧といふよりも、むしろ頭腦の問題にして、日本畫を修得する人の頭腦が、近代的智識に乏しく、殆んど時代と没交渉の觀ありなど、且君の氣焰にまかれつゝカッフエーをすゝり申候、なほ私ども見物に参りて後數日、例の暴漢の墨痕抹擦事件有之、今さらながら感慨ふかきもの有之候……以上は、ほんの素人のなまかじり聞けるまゝをしるせるもの、御一笑下され

藻鹽草

展覽會を開く
度候、早々以上、
(明治四十四年)



春ちやんの送別

昨日、和蘭の春ちやんから、次の様な端書が届きました、

「御手紙難有拜見、當方よりは、いつも、御無沙汰ばかりにて、誠に相すみ不申
 ……まづ、御變りもなく御暮しの由、大慶の至り、私も常に丈夫ですが、
 會議が済んでから後は、非常に寂敷相成りました、……早く日本に歸りたい
 ものですネ、……此繪は、例のランブランの下繪です、又、歸つたら一法螺
 吹きましようか、……」

私は此繪はがさを手にして、ふと去年、春ちやんが出帆なさつた時の事をおもひ
 起して、其時の日記を書いて見様かといふ氣になつたのです、
 あゝ春ちやん！、春ちやんは、私の極めて幼な友達の一人ですが、春ちやんは、
 大學を出ると間もなく、佛國在勤を命ぜられ、長く巴里へ往つて居られたのです

が、昨年、賜暇歸朝の際に、私は、彼の地の繪畫史のお話を伺つたのです(「日本美術」六十九號に掲載)それで、今又、ランブランの事などをいうてよこされたのでしよう、

たしか、去年の二月の初めてでしたが、春ちゃんのお母さんから「近々中に悴が亦外國へ行く事に内定しましたので、昨夜は、あれやこれや思ひつゞけて、安眠が出来かねましたが、委細は御目に懸りて」といふ様な意味の手紙が参りましたが、暫くすると、公然、春ちゃんが和蘭の日本公使館在勤を命ぜられ、いよく平和會議に先だつて、出發赴任さるゝと極つたのは、四月の初めです、それで、私も上京中を幸ひ、御見送りを致したのです、

いよく春ちゃんの出立の日、——左様、たしか四月の五日であつたかとおもひますが、——私は前夜から、泊りがけに春ちゃんの御宅へ参つて居つたのですが、さて當日は、御別れの御酒宴があるといふので、朝から御座敷も、勝手元も大混雑

併し、御客様というても、極々親しい御友達と、ほんの御近所の知己の方ばかりで、あまり大勢では無かつたのですが、私は、何んだか其日は非常に氣が、ハシヤイで、無茶苦茶に春ちゃんと口喧嘩をして居りましたら、あまり御互の鋒先のはげしいのを、春ちゃんのお母さんが見かねて、來客中の山根ドクトルの奥さんに向ひ、「幼な馴染は、どうも他人様の前とも憚らず、遠慮がなくて困ります」など、頻りに言ひ譯をして居られる、……私はハットおもはぬでもなかつたのですが、此所で口をすぼめては、私の負けになりますから、引きつゞき、

「……それにしても、春ちゃんは、何故、私の持つて來た蒲鉾の御禮を被仰らないの?!、……」

折角、特別あつらへにして、焼かせて持つて來ましたのに」

「何んだ、この松の皮みたいなもの、くっついてゐるのは、たまさんの御土産か、道理でまづいとおもつた!」

「それでも、日本一の静岡かまぼこの、極々上等ですよ、……春ちゃんは久しく外國に御滞在の爲に、蒲鉾のおいしさを忘れて御しまひになつたのよ、……ネー伯母様！」

すると春ちゃんのお母様、——私は常に伯母様といふです——は、

「ほんに、これはよいお味ですよ、あなた（春ちゃんに向ひ）もよく御禮を被仰いよ、無駄口ばかりをさかずに、……」

母上に口を添へられては、仕方ないといふ見えて、春ちゃんは、

「一筆啓上、本日は蒲鉾二切れ御贈與にあづかり、深く感謝の至りに不堪候、敬具、」

「二切ればかりぢやない、たんと持つて來たのですよ、」

「それでも、僕の御膳には、二切れしかついて居なかつたから、人の分まで禮を云ふには及ばぬサ、」

「それにさ、苟くも、身、外交官ともあらう者が、古臭い一筆啓上なんて、あんまり似合はしくないではありませんか、」

「これはしたり、外務省では、日常使用する公文は、大抵一筆啓上でとりやりをして居るのですよ、」

「エ?!、各國公使館ともですか?、」

「勿論!!!、」

「まあ驚いた、」

「だから先例も習慣も知らずに、無茶な口を聞くと大耻をかきますよ、以來氣を御つけなさい、」

「ハイ、之は一本参りました、……併し春ちゃんは大學に御出の頃、ヨク、十年後の日本の外交のやり口を見てくれなんて云うて御出でしたが、もう十年に間もないから、今度はしつかり願ひますよ、」

「妙に、言質を取つて、覺えて居たのですネ、けれど、婦人は、公事に口出しな
んかするものではありませんよ、」

「序に、私事にも立ち入る可からず、というて下されば、私は、もう春ちゃんの
御嫁さんを、さがす心配も要らなくて、らくらく致しますのにネ、」

春ちゃんは之には答へず、お母さんの方へ向ひ、

「お母さん、もし、僕が御嫁さんをもらつても、たまさんなんかに逢はせずに、
押入へかくしておいて頂戴よ、どうせこんな飛び上り御婆さんは、ろくなことを
教へないに極つて居ますからネ、」

「オホ、、、それでは旦那様と一緒に夜會へ行くより、お母様の御供をして、
御寺參りをするか、さもなければ、押入れて晝寝をした方がよいと被仰る様な、
内氣な、おとなしい、御嫁さんを探しておきましたようよ、」

何んのかのと、容易に諍の勝負がつかさうもない所へ、小間使が縁端をバタ／＼

／＼、新來の御客様ありとの御注進／＼、……やがて春ちゃんの御伯父子爵が、
御夫婦御揃ひで御出になつたので兩人の話は、こゝに中止の已を得ぬ姿！……、
其内、出立の午後四時もだん／＼差し迫つて參りましたので、そろ／＼御膳をさ
げて、最後に春ちゃんが、お父様の御位牌に向つて、御暇乞の禮拜をして居らる
ゝ後姿を見ますと、私はもう、先刻の元氣は何所へやら、そゞろに、悲しくて／＼
たまらなくなりましたから、暫時、別室へ籠つて泣き顔をふいて居る間に、皆さ
んはもうはや、ずん／＼新橋へ向はれたものと見えて、私が出る時にはさながら
御玄關はひつそりして、唯、春ちゃんの愛犬の、ハロ一疋が、ボンヤリ石段の傍に蹲
踞^がんで居るばかりですから、私は、

「御前も、もう獵の御供が出来なくて淋しからうネ、」

と捨臺詞を残して、一人おくれて俵をいそがせつゝ新橋へ着いて見ますと、もう
其所邊に見送りの方が多勢見えて居ります、

其中には、外務省をはじめ、大學側の方も澤山居らつした様でしたが、勿論、私
の見知つた顔の方は至つて尠ないのです、それで私は駒場の御百姓の椋鳥さんや
(農學者)、五月花士官殿(之はメイ、フラワーとてやはり春ちゃんの幼な友達で
す)など、言葉をかはして居りますと、其内に、半白の都筑大使の御姿も見え、
横にころげる様なドクトルの山根さんも御出になりましたして、私の顔を御覽になる
と、

「先刻は、大分、議論がはげしかつた相ですナ、」

「春ちゃんに、さんく、いぢめられましたワ、」

「いぢめられたのは、サア、何方だらうかな、……」

やがて、御親族の御婦人方も、だんく御出になりましたから、私も其御仲間へ
這入つて、がやくして居りますと、春ちゃんの従兄の五位様が、そのまた若さ
んを連れて御出になつた、すると、私の傍に御出の誰様か、「大變可愛い、ハイ

カラな、御仕度をして居らつしやる、坊ちゃんですネ、」なんていうて居られます
と、乳母やが、春ちゃんの御母さんの所へ来て、

「お内の若殿様が、御見送りながら、御別荘の方へ若様を御連れになるといふの
で、私も御供に参りますが、……今日は、貴方様の若様も、御機嫌よく御出
立になりましたして、御目出度うぞんじ上げます、……」

など、極めて懇懃な挨拶をして居ります、春ちゃんのお母さんは「それは御
苦勞様、」と云ひながら、頻りに小さい坊ちゃんを愛して居らつしやる、定めし御
心の内では、私にも、こんな可愛い、孫があつたら嬉しからうと、思つて居らつ
しやるであらうなど、私はフト、伯母様の御心を推しはかりつゝ、ぼんやり立つ
て居りますと、突然横合から、春ちゃん所の、まだ慣れぬ書生が参りまして、

「あそこに居られます、御隠居様は、誰様に居らせられますか、」

「御隠居様！、何所に？、ア、あれは、春ちゃんのおもりのみねと云ふ女中て

すよ、下町の可然所へ縁づいて、今では樂隠居になつて居るさうですが、今日は、やはり昔を忘れず、御見送りの列に加はつて居るのですよ、」

「ハハア、左様で御座いますか、私はやはり然るべき方かと存じましたので、

……、あの方の分も入場切符を求めました、……」

「みねになら、尙更、求めてやつてもよいのですよ、」

やがて汽笛が鳴つて、皆さんは、プラットホームで握手脱帽、……私は又、明日出帆の時、再び横濱でも別れを告ぐべき約束をして、改札口の所まで引きかへして参りますと、ペンキ屋の知太さん（オホ、書家の事ですよ）が、〇〇伯爵と共に私に挨拶をする爲めに、其所に待つて居られました、伯爵は、春ちゃんとは、巴里滞在中の、最も親しい御友達であつたさうで、私は御目にかゝるのは始めてですが、かねてお互に、春ちゃんから、色々聞いて居た事が在るので御座いますから、何となく、雙方で御挨拶の語以外の微笑を感じたのです、

翌日は、雨がシヨボ／＼と降つて居りました、されど私は大急ぎで横濱へ出かけて参りますと、船の都合で、出帆はもう一日延びたといふ事です、それで、私はまあ兎も角も、春ちゃんの泊つて居られる、横濱は西戸部の、生死河の御爺さん（税官長）の御宅へ参りますと、御主人の圭さんは私の顔を見るや否や、

「ヤア、厄介者がやつて来たな」と被仰る、まあよかつた、御爺さんが、最初に如斯^{こん}挨拶をなさる様なら、私も御遠慮なく、今晚はこゝへ泊つてと、心の中でちやんと極めて居りますと、圭さんの、奥さんも、お母さんも、御子さん達も、さすがお久しぶりだといふので、非常に歓迎して下さる、春ちゃんは、一寸外出して不在でしたが、春ちゃんの御母さんも御出になつたので、暫く御話をして居りましたが、私の雨の中を出て来た爲めか、しきりに頭痛がして、氣分が悪くてたまりませんから、少しねさせて下さいと、圭さんの奥さんのちいさんにおねだりして、それから、多量にアンチピリンを服用して、やすんで居りますと、ちい

さんは、御薬の口直しというて、ビスケットを澤山枕元に置いて行つて下さつて、そこで、私はねながら、御子さん達は、私の枕元にがや／＼云ひながら、いつの間にか大きなお皿のビスケットをみんな喰べて終つた頃には、もう私の頭痛もすつかり癒りましたから、起きあがつて居りますと、そこへちいさんが、這入つてゐらして、

「まあ、あれ丈のビスケットをみんな召し上つたのですか、」

「え、え、御子様達と御一緒にネ、」

というて、私はすまして居りますと、御子さん達は、また、

「みんなをばさんが喰べたのだよ、」

「本當よ、お母さん、」

など、互に、辯護の言葉を差しはさんで居られる、私は、

「多分私の頭痛は空腹のためでしたらう、其證據には、ビスケットを澤山戴いた

ら、すつかり癒りましたもの！」

「まあ、それは氣がつかせませんでしたネ、一寸、何かを差上げればよう御座いましたのに、」

「そう、眞面目に被仰られては困りますよ、兎も角も、もう癒りましたから、御安心下さい、」

というて、それから圭さんの御宅の、應接の間の方へ行つて見ますと、さすがは主に外國人を相手の、税關官舎の事ですから、裝飾もなか／＼行き届き、且は、それに、西戸部丘上、最も景勝の地を占めて居る高臺の事ですから、東の方ははるかに海を見渡し、西南には、近くこんもりと木の生へた小山もありまして、一寸繁華な横濱とはちもへぬ様な、閑静なよい眺望の所で御座います……、日暮には、春ちゃんも御かへりになり、それから御家族も一同、みんな揃つて食堂でにぎやかに御飯を戴きましたが、食事中は、また、話に色々の花が咲き、